大乱闘スマッシュブラザーズX　破創の化身と希望の戦士たち

ピノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
大乱闘スマッシュブラザーズＸ　破創の化身と希望の戦士たち

【Ｎコード】
Ｎ２３３３Ｙ

【作者名】
ピノ

【あらすじ】
それは亜空軍事件から２ヵ月後…

創造の化身マスターハンドと破壊の化身クレイジーハンドは

タブーに滅ぼされたところ（デデデ城など）を復元し、

タブーが作り上げた計画の一部（亜空間爆弾工場など）を破壊し、

世界を元の姿に戻していた。

そして最後に彼らはタブーに亜空間として乗っ取られていた自分達の部屋「終点」を
復元し、世界を完全に元に戻したのだった。

しかし実はまだタブーは滅びていなかった。

タブーは終点（元亜空間）で自らを小さな玉に封印し、復活のタイミングを図っていた。

そしてタブーは上手く復活し、クレイジーハンドに憑き、マスターハンドの力を奪い取り、第二の世界征服を開始した。

そして暴走したタブーによって世界はまたメチャクチャに…

さあ、力を奪われた神の運命やいかに…！？

と言った感じのオリジナル小説です。

スマッシュブラザーズXのアドベンチャーゲーム「亜空の使者」の後に起こったことを書いているので亜空の使者をクリアしていない方は読んでも分からないと思います。マニアックですみません。

しかしこの小説サイトには亜空の使者を描いた小説（作者は私ではありません。）もございますので、もしこの小説を見て

「面白そうだけど筋道が分からない・・・ｏｒｚ」

なんて方は「亜空の使者」を検索ワードとして、その小説を見つけ出し読んでいただく事をお勧めします。

その小説の作者から許可を得ていないのでタイトルや作者のペンネームを載せることはできませんので、僕の言葉からその小説を察してください。

それでは少し話がそれましたが

『大乱闘スマッシュブラザーズX　破創の化身と希望の戦士たち』

の始まりです！！

序章　～タブーの復活～（前書き）

警告

ここではスマブラXのオリジナル小説を書いています＾＾

隠しキャラなどのネタバレがあるのでネタバレを好まない方は注意してください。と言うより亜空の使者をクリアしていない、あるいは知らない方が呼んでも分からないと思います…。

マニアックですいません…。

序章　～タブーの復活～

ここは何も無い闇の空間…

ニヒルで暗く、ただ闇が広がる寂しい空間…

そこに今何かが現れようとしていた・・・

巨大な左手
「うぐぁあああああぁぁぁぁぁ！！」

巨大な右手
「ぅう…　やっと我らの部屋へ戻ってこれたか・・・」

巨大な左手
「何とかなったようだな・・・」

突然その闇の空間にどこからとも無く巨大な白い右手と左手が現れた。

右手が創造の化身マスターハンド、左手が破壊の化身クレイジーハンドだ。（以後Ｍハンド、Ｃハンド）

そう、この闇の空間は彼らの部屋だったのだ。

Cハンド
「何も無いな・・・」

Mハンド
「タブーめ…我らの部屋を亜空間にし、世界征服をもくろむとはふざけた真似を…。」

Cハンド
「ともかく復元しよう。さあ、やってくれ」

Mハンド
「あぁ。」

そう言うとMハンドはパチりと指を鳴らした。

パアアアアアアアアア！！

すると辺りがまばゆく光り、彼らの部屋が復元された。
…とは言っても平らな台の様なものが現れただけだったが。

この台は彼らの世界の戦士達に「終点」と呼ばれている。

Cハンド
「見事だ。力は衰えていないようだな…」

Mハンド
「あの程度のことで衰えるほど弱くは無い。我らは2体で1体だ。創造の化身である我が必要なものを作り、代わりに必要の無いものをそなた（クレイジーハンド）が破壊する…。どちらかが欠ければ世界のバランスが崩れてしまう。やはりあの程度のことでやられる訳にはいかないのだ。…勝てなかったのは事実だがな…」

Cハンド
「はっはっは、そうだな。ん？なんだこれは？」

クレイジーハンドは台の上に見覚えの無い青黒いエネルギーの玉を見つけた。

Mハンド

「タブーが残していった物のようだな。今度はお前の番だ。お前の力を見せてもらおう」

Cハンド
「うむ。」

そういうとクレイジーハンドはその玉を握りつぶした。…すると

???
「……我を目覚めさせたのはお前か。」

どこからか声が聞えて来た。
だがその束の間、クレイジーハンドが突然黒いオーラに包まれた。

Cハンド
「ぐあああぁぁぁ!!!」

Mハンド
「な、なんだ?まさか・・・タブーか?」

マスターハンドは恐る恐る訊いた。以前の悪夢を思い出しながら…

Cハンド

「フフフ…そうだ。我の名はタブー。一度は世界征服を試みたが失敗に終わったのは言うまでも無い。
だが！この破壊神の体を乗っ取った我に敵などいない！！さあ第二の世界征服の始まりだ！！覚悟しろ！！」

クレイジーハンドは狂っていた。タブーに憑かれ、心も体も乗っ取られ、タブーへの抵抗すら出来なくなったクレイジーハンドはマスターハンドへの敵意を表した発言をしている。

Mハンド
「くっ…。おのれ…おのれええぇぇぇ！！」

マスターハンドは気合をこめてクレイジーハンドへ殴りかかった。
しかし・・・

Cハンド
「ふっ。無駄なことを。」

そう呟くとクレイジーハンドは黒いオーラをマスターハンドに絡ませた。

Mハンド
「何・・・！？」

Mハンド
「うぅぅぅ…　ぐはっ！！　何故だ？力が抜けていく…創造の化身としての力が抜けていく…そんな、バカなぁ！」

Cハンド
「甘いな…。我には敵わないと言ったはずなのに、自ら突っ込んでくるとはな。お前の力はもらって行くぞ。八ッ八ッハッハッハ！！！！」

Mハンド
「待て！！我の力で何をする気だ！？」

Cハンド
「フッ、世界征服に使うだけだ。安心しろ。征服が終わったらこの力お前をで楽にしてやる。お前もまだ使い道はある。まあ無駄話はこの辺にしてこの力を試してみよう。ハアアアァッ！！」

そう言うとクレイジーハンドは力強く指を鳴らして巨大な剣を作り上げた。そしてその剣でマスターハンドを斬りつけた。

ズバァ！！

Mハンド
「うぐっ！！」

剣は見事にクリーンヒットし、マスターハンドに深い傷を負わせた。

Cハンド
「フッ、見事だ！！では次は…」

そう言うとクレイジーハンドは何か特殊な力をこめて剣を握りしめて破壊した。

ばきっ！！

Cハンド
「やはり見事だ。では行くとしようか。グァッハッハッハ！！！」

マスターハンドはタブーに創造の力を持って行かれてしまい、
気が付けばただの巨大な右手でしかなかった。

Mハンド
「待て・・・どこへ行くんだ！？」

Cハンド
「フン、今の貴様には関係の無いことだ。愚かなでくの坊はそこで大人しく眠っていろ。せいぜい良い夢でも見るがいい。さらばだ！！」

そう言うとクレイジーハンドはどこにあるのやら闇の空間の出口からどこかへと出て行った…

Mハンド
「バカな…」

そしてマスターハンドはそのまま何も出来ずにぐったりと気を失ってしまった…

序章　～タブーの復活～（後書き）

読んでくれてありがとう。
これからも連載していきます。

つまらなかったらゴメンね

第1章　～平和な戦いからの異変～（前書き）

ここから本格的にこの小説が始まります。
お楽しみに~！！

第1章　～平和な戦いからの異変～

「さあ、始まるようですね」

「そうね、楽しみだわぁ」

ここは空中に浮かぶスタジアム。

このスタジアムの観客席で2人の女性が楽しげにお喋りをしていた。

白いドレスの姫ゼルダとピンクのドレスの王女のピーチだ。

彼女らは今から始まる試合を心待ちにしていた。

ピーチ
「私はマリオに勝って欲しいわぁ。何度もお世話になってるんだもの～。」

ゼルダ
「あら、わたしが応援するリンクも負けてないわ。」

ピーチ
「どちらが優勝するか楽しみね」

そんな楽しいお喋りの途中ゼルダが突然顔をしかめて言った。

ゼルダ
「…もうあんなことは起こらないわよね？」

ピーチ
「あら、ゼルダったらそんなこと心配してるの？もう亜空軍は滅びたのよ？どの道またタブーみたいのが攻めて来たって大丈夫よ。今の私達なら、たとえお月様が攻めてきても大丈夫よ」

ピーチはやさしくゼルダを宥める。

ゼルダ
「そうね考えすぎだわ、楽しく行きましょ♪」

ピーチの言葉を聞いて安心したゼルダの顔に安堵の笑顔が戻りピーチも安心したようだ。

？？？

「なあなあ、だれが勝つか賭けでもやらないか？当たったら一気に大金持ちだぜ！？」

楽しくお喋りしている女性たちにとてつもなく下品な男が話しかけ始めた。ワリオだ。

ピーチ

「ちょっとなあに？あなたと一緒にいると私達まで下品に見えるからあっちに言っていてちょうだい。」

ワリオ

「なんだよ！！せっかく俺様が誘ってやってるのによ！！俺様も仲間に入れてくれよ！！」

ゼルダ

「でも今は私たちだけの時間を下さらない？私はピーチと一緒にゆっくりと試合を見たいから悪いけど後にしてね。」

ワリオ

「あ～！！そうかそうか俺様は所詮のけ者だよ！！あっちに行ってればいいんだろ！？」

ピーチ

「もう分かったからあっちへ行っててよ。」

ピーチの言葉を聞いてワリオはふて腐れた様に2人から離れていった。…と見せかけて、

ワリオ
「俺様をのけ者した罰だ！！喰らえ！！」（ぷぅ～～～）

ワリオは相手にされなかったことに対して怒って2人におならをかけた。そして「ざまあ見ろ！！」と吐き捨てて去っていった。

ピーチ
「きゃあ～～！！くっさぁ～～～～い！！」

ゼルダ
「ケホッ、ケホッ、ひどい臭いですね」

2人がワリオに不満を漏らしているとスタジアムにアナウンスがかかり始めた。

アナウンス
「レディースアンドジェントルマーン！！今回も熱い戦いが幕を開

けたぁー！！」

ピーチ
「ふう、やっと始まったようね。・・・・・・・・なんかまだ臭い…。」

アナウンス
「さあ、ではルールの確認です！！今回は８人制のトーナメントバトル！！組み合わせはこちら！！」

マリオ　ー　デデデ
カービィ　ー　リュカ
ヨッシー　ー　ピット
ディディー　ー　リンク

ピーチ
「マリオとリンクは…決勝で当たることになるわね」

ゼルダ
「そうね、お互いに勝ち進むといいわね。二人の決勝が楽しみね。」

そして第一試合の二人の選手が入場してきた。

マリオ
「ひゃっほう！！」

デデデ
「やってやるぞい！」

ピーチ
「あ、マリオだわ！！頑張って～～！！」

ピーチはマリオの登場を心底喜んでいた。

アナウンス
「さあ！！お互い尋常に…。一回戦スタート！！」

試合が始まった。

ピーチ
「マリオー！頑張ってぇ！！」

ピーチの応援に応えるようにマリオの猛攻が始まった。

マリオ
「行くぞ！！ファイアボール！！」

ボン、ボン、ボン、

デデデ
「あちゃ、あちゃ！！何するぞい！！」

マリオのファイアボールが炸裂し、デデデのガウンに燃え移った。

ゼルダ
「見事ですね～」

デデデ
「おのれ～。反撃ぞい！！喰らえワドルディぞい！！」

デデデは力強くワドルディを投げつけ、まわりを驚かせた。

ゼルダ
「でもやっぱりデデデさんも強そうね」

ピーチ
「マリオも苦戦するかしら？」

マリオ
「なんの！！」

だがしかし、マリオはワドルディに向けてスーパーマントを翻し、デデデにワドルディをぶつけて見せた。

デデデ
「痛っ！！やってくれるぞい！！」

ピーチ
「流石マリオね！見事だわ～」

ピーチが感心するなかマリオに反撃をしようとデデデがハンマーを掲げた。

デデデ
「ここからワシの反撃ぞーーい！！」

…だがそんな意気込みもむなしくマリオの更なる連弾に飲み込まれる一方だった。

マリオ
「いくぞ！」

マリオは走って一気に接近したかと思うとスライディングを決めた。さらにそのままの勢いでメテオナックルを決め、そこからさらにヘッドバットをかました。

…だがまだ終わることなくスーパージャンプパンチへと流れるように決めていった。

「ぐうう、もうここまでかぞい…」と呟きながらふらつくデデデに対してピーチとあの男は大喜びだった。

ピーチ
「きゃ～～！！マリオってやっぱりすごいわね！！」

ゼルダ
「これなら決勝まで進めそうですね～。」

ピーチ
「あら？何行ってるの？マリオは優勝するのよ！」

ゼルダ
「でもリンクも負けてないわよ～。」

2人がのんびり話していると、2人の会話を切り裂くようなあの男の声が地鳴りのように響いた。

ワリオ
「がっはっは！！金だ金だ！！マリオがスーパージャンプパンチを繰り出せばコインが飛んできて儲かるぞ！！行けー！！もう一発決めろーー！！」

ピーチ
「なんなの？まだここにいたの？　お願いだからあっちに行っててよ。あなた邪魔なの」

ワリオ
「なんだなんだ？お前らもう一発お見舞いさせたいのかあ？」

ゼルダ
「いい加減にしないと怒りますよ？」

ワリオ
「へへーん！知るかあ！やっぱりもう一発喰らえ！！」（ブウウウ

ウウ）

またしてもワリオが2人におならをかけて去っていった。

ピーチ
「ケホッ！！もういい加減にしてよ！！ケホッ！ケホッ！臭っ！！」

ゼルダ
「こんな下品な人初めてです。ケホッ、ケホッ。」

ピーチ
「で、マリオは・・・、」

ピーチは試合に目を向けるとマリオがデデデにとどめを刺しているところだった。

マリオ
「とどめだ！！ファイア掌抵！！」

ボボーン！！

デデデ
「ぐわああ！」

アナウンス
「勝負あり！！　勝者マリオーー！！」

ピーチ
「やったーー！！マリオが勝ったぁ！！」

ピーチはマリオの勝利を心底喜んでいた。

マリオ
「ナイスファイト！」

デデデ
「ぬぬ～！おまえなかなか強いぞい！！このワシを負かすとは大した者だぞい。」

そして選手たちはお互いに握手を交わしてスタジアムから去っていった。

ゼルダ

「勝ちましたね～。」

ピーチ
「よかったわ。つぎもきっと勝ってくれるわ♪」ピーチ

だがそんな2人の会話を切り裂く下品な声がまた響いた。言うまでも無くワリオだ。だが今回は何かが違う。ワリオが悲鳴を上げていた。

ワリオ
「ぐあああ！！離せよ！！離せって言ってるだろ！！」

ピーチ
「何なの？ワリオったらしつこいわね！！…あら？」

ゼルダ
「今、確かにワリオの声が・・・・・・。でもいない…。どうかしたのかしら？」

ピーチ
「離せとか言ってたわ。何かあったのかしら…？でもまあいいわ。ワリオったらあんなに酷いことしてくれたんだから、きっとバチが当たったのよ。ほおって起きましょう。」

ゼルダ
「そうね・・・きっとそうよね。」

ピーチたちもおかしいとは思ったが散々酷い事をしたワリオを気にかけることはなく、ワリオはほったらかされてしまった。

しかも皮肉なことにワリオの異変に気付いていたのはピーチ達だけだったため、ワリオはだれにも助けてもらえなかった。

そしてワリオは助けてもらえなかった。

たとえクレイジーハンド（タブー）にさらわれても…

第1章　～平和な戦いからの異変～（後書き）

もし何かおかしい所や
口調がいまいちなどの
訂正するところがあったらどんどん行ってください。

第2章　～一人目の犠牲者～

ワリオ
「うう…。」

ワリオは限りなく広がる闇の空間の中にポツンとある台の上で目覚めた。

ワリオ
「あれ？あれれれ？ここはどこだ！？俺様って何してたんだっけ！？」

ワリオはぼんやりと考え出した。ただでさえ働かない頭を懸命に働かせて。

ワリオ
「え～と…あ゛～～っと？あぁ！！思い出せねえ！！」

ワリオは思い出せないことに苛立ち地団駄を踏んだ。そのとき！

チャリン……。

ワリオのポケットから一枚のコインが落ちて何も無い空間に寂しげにコインが落ちる音が響いた。

ワリオ
「コイン……。あ゛ーーー！！思い出した！！このコインってスタジアムでマリオが技と同時に飛ばしたコインだ！！そうだ！俺様はスタジアムに居たんだ！！そしたらいきなりバカでかい手に掴まれだんだ！！で、その後に…！！　・・・その後に？…ああ！！やっぱり思い出せねえ！！俺様ってどうなっちまったんだあ！！」

何度考えても思い出せないことに苛立つワリオの目にぐったりと倒れている大きな右手が写った。

ワリオ
「ん？んんん？？あれって俺様をこんな所まで連れてきた手だよな！！くそぉーー！！」

わけが分からずに混乱したワリオはその巨大な右手へ突進した。

ワリオ
「おいこらぁ！！俺様をこんな所に連れてきやがって～！！起きろーー！！」

しかしその右手はピクリとも動かなかった。ぐったりと倒れたまま。

ワリオ
「くそぉ！！俺様の攻撃でも起きないとは、まさか死んでいるのか？・・・・ん？こいつ手の甲にでかい傷があるぞ！！　・・・・よ～し！！食らえぇ！！」

ワリオは右手にある傷に目がけてパンチを繰り出した。すると動かなかった右手がピクリと動き出し、フラフラと言葉を発した。

Mハンド
「うう・・・・・・・・・・・・我はいったい何をしていたんだ？うっ！！この傷は確か・・・・。そうだ、タブーの仕業だったな。」

ワリオ
「おいおいおい！！お前！！俺様を元の世界へ戻しやがれ！！」

ワリオは起き上がった巨大な右手（マスターハンド）に文句を言いながらキックを繰り出した。

するとマスターハンドはゆっくりと宙へ浮き上がり、ワリオの姿を確認した。

Mハンド
「なんと！！そなたはワリオではないか！なぜここにいるのだ？」

ワリオ
「あ？俺様のことを知ってるのか？まあ有名人だから無理もないな！！。…って俺様をこんな所に連れて来といて何言ってやがんだ！！早くもとの世界へ戻しやがれ！」

マスターハンドはまだ頭（？）がはっきりしなかったがワリオの言葉を聞いて理解した。ワリオはきっと自分をクレイジーハンドだと勘違いしているのだと。

Mハンド
「ワリオよ。そなたをここへ連れて来たのは私ではない。そなたを連れて来たのはおそらく私の相方のクレイジーハンドだ。私はマスターハンドであってクレイジーハンドではない。実は今クレイジーハンドはタブーに憑かれて狂っている。そのためタブーの計画にそなたが巻き込まれたと思われるのだが…」

ワリオ
「よくわかんねえや。で、なんでお前は俺様の名を知ってんだよ？」

Mハンド
「逆に聞くが…。そなたはもう亜空軍の事件を忘れたのか？」

ワリオ
「亜空軍の事件だと？・・・ん！思い出したぞ！！そうだあの時に俺様をこき使いやがった手の化け物だな！！
後で働かせた分キッチリ請求してやるからな！！もちろんすぐに払わなかった分の延滞料金も込みだからな！！で、とりあえず今は俺様を元の世界に戻してくれよ！相方ならそれぐらい朝飯前のウンチより簡単だよな？」

Mハンド
「朝飯前のウンチか…私にはそっちの方が難しいような気が…。おっと話がそれたか。しかしワリオよ。済まないが今の私にはそなたを元の世界に戻す力は持っていないのだ…。」

ワリオ
「あ？なんでだよ」

未だに状況が理解できないワリオにマスターハンドが分かりやすく説明した。

ワリオ
「ふ～ん。やっぱよく分かんねえや。でもとにかくお前は今ただの化け物で役立たずって訳だな。…ん？
てことは？…俺様が元の世界に戻る方法は無いってことか～～！？
おいおいおい！！どうしてくれんだよ～！！俺様は戻りたいんだよーー！！」

？？？
「戻らせてやろう。」

やっと状況が理解できたが、混乱して叫び散らすワリオの元にどこからか声が聞えた。マスターハンドに似た声だった…。

ワリオ＆マスターハンド

「誰だ！？」

Cハンド
「フハハハハ！！私だ。そうだ、タブーだ。それにしてもワリオよ、久しぶりだな。元の世界に戻りたいようだな。安心しろ。パワーアップして戻してやるぞ。」

どこからともなくクレイジーハンドが現れたのだった。

ワリオ
「あ？お前が噂のクレイジーハンドか！？おい！！俺様は戻れればそれでいいんだよ！！パワーアップして戻るってどういうことだよ！？また変なことするんじゃねえだろうな！？」

Cハンド
「何を言うか、お前を常に切り札状態にしてやると言うことだ。どうだ？ワリオマンなら金稼ぎにも好都合ではないか？　・・・おっとそうだ！！私がこの役立たずの代わりにお前にコインを支払うとしよう。さあどうだ？今なら本来払う額の5倍払うことにするぞ？これでも乗らないと言うならお前はこの闇の中で一生を過ごすことになるだろうがな…。」

ワリオ
「へっ！！5倍だなんてやれるモンならやって見やがれ！！」

Cハンド
「そうか…ならば」（パチっ）

そういうとクレイジーハンドは徐に指を鳴らした。すると…、

ジャラジャラジャラジャラジャラァ！！！！！

突然ワリオの目の前にとてつもない量のコインが現れた！

ワリオ
「うおおぉぉ！！金だ！！金だ！！お前やるじゃねえか！！やっぱこんだけの金があるんだから元の世界に戻らねえとな！！おい！！左手！！何でもいいから戻しやがれ♪」

金を見たワリオは一瞬で我を忘れて浮かれてタブーの持ちかけた怪しい話に乗ってしまった。

Mハンド
「くっ・・・ 我の力をこんなことに…。」

Cハンド
「そうか。行く気になったか。ならばまずお前をパワーアップさせることにしよう。」

クレイジーハンドはそう言うと金に浮かれているワリオを掴み上げ、そのまま握り締めた。

ワリオ
「痛て！おい、もっとやさしく包めよ！！俺様はデリケートなんだぞ！！」

Cハンド
「フンッ！！」

パアアアアアアア！！！

クレイジーハンドがワリオに力をこめると光とともに無数のスマッシュボールが現れた。

Mハンド
「ワリオ…。もうだめか・・・。」

マスターハンドの言葉もむなしくクレイジーハンドが手を離したと

きにはワリオはワリオマンになっていた。しかも微量だが何か悪いオーラを帯びている。

ワリオ
「うう。俺様は本当にパワーアップしたみたいだな！！じゃあ早く元の世界に戻してもらおうか！」

ワリオは奇抜な格好でタブーに再交渉をした。しかし…、

Cハンド
「黙れ。」

ビシャアアァァァァ！！

そう言うとクレイジーハンドはワリオに暗黒の稲妻を落とした。

ワリオ
「ぐふっ！」

するとワリオの体から悪いオーラが更に大量に溢れ出した。

ワリオ
「…ぐあああぁ！！」

Cハンド
「成功したぞ！！さあワリオよ！！もう我の計画はお前の頭に叩き込まれたはずだ！！行け！！ワリオマン！！」

タブーがそう言うとワリオは何も言わずにこの闇の中から出て行ってしまった。

Mハンド
「タブーめ…。」

Cハンド
「どうかしたか、でくの坊。悪いが我も暇ではない。また行くところがある。お前はここで留守番だ。」

Mハンド
「くそっ・・・。」

そう言うとクレイジーハンドはまたどこかへ行ってしまった。

Mハンド
「ん？なんだこれは？」

マスターハンドはタブーが何か綺麗な玉を落としていったのを見た。

しかしこれは一体何なのか…

第3章　～現れない戦士たち～

ワリオマン
「がっはっは！！金があれば何でも出来るぜ！！」

タブーに洗脳されたワリオはタブーの計画にのっとり、空中スタジアムに戻っていた。

ワリオマン
「さ～て、適当にさらって来ればいいんだよな。」

ワリオはタブーに暗黒の稲妻で洗脳された時に亜空軍事件にかかわった戦士たちを適当にさらって来るように頭にインプットされたらしい。

ワリオマン
「じゃあ、ここらで適当に探すとするか！」

ワリオマンはマントを使ってスタジアムの中央へ飛んでいった。

その頃観客席ではピーチとゼルダが第二試合が始まるのを心待ちにしていた。

ピーチ
「次の試合はカービィ対リュカね。」

ゼルダ
「カービィにはあの時お世話になったわね。」

？
「うむ、確かにそろそろだな。」

２人の姫の横で一人の男がスタジアムを眺めながらつぶやいていた。
その声はワリオとは違い、賓のある渋い声だった。

ピーチ
「あら、メタナイトさん。お久しぶりですね。あなたも観戦ですか？」

メタナイト
「然様。カービィを見たくてな。カービィの戦い方は参考になるからな。」

そう、彼はメタナイトだった。クールで女性陣に人気らしい。

ゼルダ
「もし良かったら一緒に見ましょう。」

メタナイト
「かたじけない」

メタナイトはゼルダに誘われ一緒に試合を見ることにした。

そして、そうこうしていると試合の開始を知らせるアナウンスが流れ始めた。

アナウンス
「さあ！！ただいまより第二試合の始まります！！両選手入場！！」

まずはリュカが入場してきた。

リュカ
「僕はこの戦いを通してもっと強くなるんだ．．．」

リュカは弱々しい自分を変えたいと思い参戦したようだ。

アナウンス
「続いてカービィ選手の入場です！！」

ピーチ
「はじまったわね♪」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・。しかしカービィは出てこなかった。いくら待っても。

アナウンス
「カービィが出てこない・・・。ここは仕方ありませんがリュカを不戦勝といたします。ご理解ご協力のほどお願いいたします。」

アナウンスを聞いて会場がざわつき始めた。

メタナイト
「何故だ？何故出てこない？」

ゼルダ
「本当にどうしたのかしら・・・？」

メタナイトやゼルダが本気で心配するなか、能天気な者もいた。

ピーチ
「でもカービィのことだから試合なんて忘れて食べ物を追い求めているなんてことは？」

メタナイト
「う・・・うむ。確かにカービィなら有り得ない事ではないが…。」

気付けばざわついていた会場もピーチと同じ考えでまとまっていた。

アナウンス
「では・・・。少しアクシデントがありましたが第三試合を開始いたします。」

ゼルダ
「まあ、今回は残念ですが、ここからは純粋に観戦を楽しみましょう。」

メタナイト
「うむ。そうするとしよう。」

そして何事も無かったかのように第三試合が始まった。第三試合は

ピット対ヨッシーだ。

アナウンス
「さあ選手の入場です！！」

まずはピットが入場してきた。

ピット
「いくぞ！！勝負だ！！」

アナウンス
「さあ、続いてはヨッシー選手の入場です！！」

メタナイト
「やっと始まるな。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

しかしヨッシーも出てこなかった。いくら待っても…。

アナウンス

「おっと。ヨッシーも出てこない…。ここは仕方ないですがピットを本日二度目の不戦勝といたします。」

またしても会場がざわつき始めた。

メタナイト
「ヨッシーまでもか！？」

ゼルダ
「本当に何があったのかしら．．．？」

ピーチ
「まあまあ、きっとカービィと一緒に食べ物を追い求めてるのよ。ヨッシーならよくあるわ。」

気付けば会場のざわつきは、またしても腹ペコ説で丸く治まっていた。

メタナイト
「うむ．．．。悪いことが起こらなければ良いが…。」

ゼルダ
「まあ今はこの説を信じましょう。さあ！次はリンクの出番よ！」

メタナイト
「リンクか。彼の剣の扱いも楽しみだな。」

アナウンス

「さあアクシデント続きでしたが第四回戦を開始いたします！！」

そしてまた何事も無かったように試合が始まった。

アナウンス
「まずはディディーコングの入場です！！」

ディディー
「ウキーー！おいらの力を見せてやるぞ～！！」

ディディーは格好つけたように転がりながら登場した。

アナウンス
「さあ続いてリンクの入場です！！」

ゼルダ
「ついに来たわ！」

……………………………………。

しかしリンクは現れなかった。カービィやヨッシー同様に…。

ゼルダ
「リンクまで…。どういうことなの・・・？」

メタナイト
「さすがにおかしいぞ・・・。」

ピーチ
「まあ落ち着いて。きっとリンクも食べ物を求めて……」

ゼルダ
「リンクはそんなに食いしん坊じゃないわよ！！」

ピーチ
「そ…、そうだったわね・・・。」

今回は腹ペコ説が通用するわけも無く会場はざわめいていた。

ゼルダ
「何が原因なのかしら…？」

メタナイト
「控え室が怪しいな…。行って来る。」

ゼルダ&ピーチ
「あ、待って!!私も行くわ!」

メタナイト
「そうか…。ならば危険は承知してくれ。……と言うまでも無いか。」

そう言うとピーチはパラソルで、ゼルダはフロルの風で、メタナイトは滑空しながらスタジアムの中央へ飛び、選手たちの出入り口から控え室へ向かっていった。

ピーチ
「ここが控え室のようね…。」

彼らの進んだ先には三つの控え室があった。

1つは控え室A。　マリオ、リュカ、ピット、ディディーの控え室だ。

もう1つは控え室B。　カービィ、ヨッシー、リンクの控え室だ。

そして残りの1つはVIPルームだ。デデデ専用の豪華な控え室だ。

メタナイト
「うぬ。見るからに控え室Bが怪しいな。入るぞ！！」

ゼルダ
「ええ。行きましょう」

（ガチャッ）

メタナイトが控え室の戸を開けた。　すると・・・。

???

「ガッハッハ！！3人もさらえば追加ボーナスでガッポガッポだぜ！！」

賓のない男がカービィとヨッシーとリンクのフィギュアを抱えて控え室の片隅にあるブラックホールの様な所へ入ろうとしていた。

メタナイト

「待て！！何者だ！？」

メタナイトは愛剣である宝剣ギャラクシアを構えながら気合をこめて叫んだ。

ワリオマン

「あ？俺だよ！ワリオだよ！！」

その賓のない男はワリオマンと化したワリオだった。

メタナイト

「ワリオ…。なぜワリオマンになっているんだ！？何をする気だ！！またタブーの仕業か？」

ワリオマン
「けっ！ワリオマンが罪なほど格好良いってことか！？嫉妬も程々にしとけよ！！で、俺様は金のために働いているだけだ！　タブーなんて知ったこっちゃねえ！！　とりあえずこいつらを何だかって言うでかい左手に渡せば儲かるんだぜ！！」

ワリオマンと化したワリオは怖いものなんてなかった。

ゼルダ
「ワリオ．．．。よく分からないけどリンクやカービィを返して！！」

ピーチ
「そうよ！！返しなさいよ！！」

そのときワリオはニヤりと不敵に笑いを浮かべた。

ワリオマン
（フッフッフ！！これは良いことを思いついたぞ！！）

ワリオマン
「へっ！！返すもんかよ！！おい！それよりお前らもフィギュアになりやがれ！！こうすれば俺様はもっと儲かるぜ！！」

メタナイト
「なんだと！？」

ワリオマン
「行くぜえぇぇ！！」

そう言うとワリオはどこからかダークキャノンを取り出した。

ワリオマン
「発射ぁ！！」（ズキュウウン！！）

ダークキャノンから黒い矢が飛び出し、メタナイト目がけて飛んでいった！

メタナイト
「甘いな。」（バサリ）

しかしメタナイトはディメンションマントでキャノンの矢をひらりとかわした。そしてその矢は後ろにいるゼルダへ飛んでいった。

ワリオマン
「くそ～！！かわされちまったかぁ！！　んん～？でも後ろにゼル

ダがいるぞぉ！！　行けえ！！そのままゼルダに当たれえぇ！！」

ワリオは一度は地団太を踏んだが、ゼルダに当たるという期待に胸を膨らませていた。

ゼルダ
「ふん、そんなもの大した事ないわ」（キラン！）

しかしゼルダはネールの愛でキャノンの矢を跳ね返した。

ワリオマン
「くそぉ～～～！！ひらひらと避けやがって～～！！」

ワリオはまたも地団太を踏んだ。　…しかしそのときだった！！

ワリオマン＆メタナイト
「なに！？」

ブシャアアア！！

…………………………

……………　ことん。

なんとゼルダが跳ね返した矢はゼルダの前にいたメタナイトに刺さってしまった。そしてメタナイトはフィギュアになってしまった。

ピーチ
「きゃ！！メタナイトが！！」

ゼルダ
「私ったらなんてことを…」

ワリオマン
「へへーん！！これは儲けたぜ！！さあお前らも大人しくフィギュアになりやがれ！！」

ワリオはメタナイトのフィギュアを拾い上げたかと思うとまたダークキャノンを2人に向けた。

ワリオマン
「さ～て、また跳ね返されちゃ面倒だな。跳ね返せないようにパワーMAXで行くぜ！！」

ダークキャノンに力が溜まっていく。そしてパワーがマックスになった。

ゼルダ
「もう、ここまでかしら…。」

ピーチ
「誰か・・・。」

ワリオマン
「終わりだあ!!」

そして!!

ブシュウウウゥ！！

しかし！

ワリオマン
「うわ！！なんだ！？」

なぜかワリオが戸惑いの声を上げていた。あれだけ有利な状況にいたワリオが戸惑っていた。
そのとき誰かの声が聞えた。その声の主はワリオでもピーチでもゼルダでもない、この場に居ない者の声だった・・・。

？？？
「危なかったな。」

？？？
「間一髪だったぞい。」

ピーチ
「この声…。まさかマリオ…！？」

ゼルダ
「デデデさんの声もしたような…？」

まさにそうだった。声の主は紛れもなくマリオとデデデだった。しかしなぜ彼らがここにいるのか、姫達はもちろん理解できなかった。

マリオ
「危なかった。ピーチ姫、お怪我はありませんか？」

ピーチ
「ええ一応無事よ。しかしマリオ、何故ここに？」

ゼルダ
「デデデさんまで何故ですか？」

デデデ
「なにやら隣の控え室が騒がしいと思ってマリオと見に来たらワリオが2人を攻撃しようとしてたぞい。」

マリオ
「だからとっさにポンプでワリオを妨害したって訳なんだ。」

ピーチ
「そういうわけだったのね」

ゼルダ
「なんとお礼を言ったらいいのか・・・。」

4人はそれぞれの状況を理解しあった。しかしそんな中一人苛立っている男がいた。その男は獲物をライバルに奪われてとても苛立っていた。

ワリオマン
「おい!!コラぁ!!何してくれてんだあ!!俺様のチャンスをどうしてくれるんだあ!!こうなったらお前ら全員フィギュアにしてくれるわ!!」

マリオ
「なんだって!?」

ワリオはそう言うとダークキャノンに手をかけた。

ワリオマン
「行くぜえ！！まずはパワーチャージだ！！」

そしてワリオはダークキャノンのチャージボタンを押した。

デデデ
「マズいぞい！！」

……しかしダークキャノンは動かなかった。

ワリオマン
「あれ？おかしいな・・・？オイ！！チャージだって言ってんだよ！！オイ！！何で動かねえんだよコラ！！」

ワリオはダークキャノンが動かないことに苛立ってダークキャノンを数回平手で叩いた。するとダークキャノンの表面から水が飛び散った。無論、この水はマリオのポンプの水だ。ワリオもこの水を見てマリオの水だとすぐに気付いた。そして、キャノンの異常とこの水との関連性にもすぐに気付いた。

ワリオマン
「水・・・。この水って・・・。マリオォォ！！この野郎！！お前

のせいでキャノンが壊れちまったじゃねえかぁ！！どうしてくれんだよオイ！！この野郎！！弁償しやがれ！！というか弁償代の代わりにフィギュアになりやがれぇ！！！」

マリオ
「何を言うんだ！？人をフィギュアにして売りさばく方がおかしいじゃないか！！俺はそれをやめさせただけだ！！」

ピーチ
「そうよ！マリオの言うとおりよ！それにキャノンが使えないならマリオをフィギュアにするのなんて無理じゃないの？」

マリオとピーチはワリオに激しい反論と一つの疑問を投げかけた。
するとワリオは得意げに答えた。

ワリオマン
「へへーん！！こんなものがあるんだよ！！」

ワリオはどこからか大きな金貨のようなものを取り出した。

ゼルダ
「それは一体・・・？」

ワリオマン
「教えてほしいか！？こいつはスマッシュプレートって言ってな！！これをぶつけられた奴はフィギュアになっちまうんだよ！！！ガッハッハ！！マリオめ！！恨むんならフィギュアになってから恨むんだな！！」

ワリオはそう吐き捨てるとスマッシュプレートを円盤投げの要領でマリオに向けて投げつけた。

ワリオマン
「おらぁ！！」

ピーチ
「マリオが・・・！」

ギュゥイイイイイィィン！！！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・コトン。

ワリオマン
「ガッハッハ！！決まったぜ！！」

ワリオはマリオをフィギュアにした事を喜んでいた。・・・しかし。

マリオ
「う～ん？俺はもうフィギュアになったのか？」

一同
「えっ！？」

マリオ
「あれ！？俺・・・、生きてる！？」

ワリオマン
「あぁ！？何でだ！？俺はお前をフィギュアにしたはずだぜ！？」

ゼルダ
「まあ！！あれをみて！！」

ゼルダは突然マリオから少し離れたところを見て指を指した。何かを見つけたようだ。そして皆はゼルダの言葉に反応してゼルダの指すほうへ目をやった。

ピーチ
「えっ・・・！？どういうこと！？」

そこにはデデデのフィギュアが転がっていた。

ワリオマン

「ちっ！！水で手が滑っちまったみたいだぜ！！まあデデデのフィギュアを儲けたから今だけは見逃してやるか！俺様のそんなに暇じゃねえんだよ！！じゃあな！！次に会うときが楽しみだぜ！！」（チクショー！！スマッシュプレートがもう一枚あればマリオをフィギュアに出来たのにな．．．。）

マリオ
「待て！！フィギュアを返せ！！」

ワリオマン
「なんだ！？このワリオマンに勝てると思ってんじゃねえだろうな！！かかって来るなら加減はしねえぜ！！」

ゼルダ
「マリオ落ち着いて！！さすがに無理よ！！」

マリオ
「くそっ．．．。」

そしてワリオはマリオ達に舌を出して挑発し、ブラックホールのような所へ入っていった。

マリオ
「くそっ！後を追ってくる！！」

そう言ってマリオもブラックホールのような所へ入ろうとした。しかし、もうそのブラックホールの様な物は無かった・・・。

ピーチ
「行っちゃったわね・・・。」

ゼルダ
「これって、やっぱり嫌な予感がするわ…。皆に知らせなくちゃ！！」

マリオ
「ああ！そうしよう。今はそれが一番だ！」

ピーチ
「私も手伝うわ！！」

そう言うと二人の姫と一人の男は控え室を後にした・・・。

第3章　～現れない戦士たち～（後書き）

ここからどうなるかが自分でも楽しみです！！

引き続き応援よろしくお願いします＾＾

第４章　～某星の皇帝とキングの像～（前書き）

眠い…。現在ＡＭ３：０６です（笑）

第４章　～某星の皇帝とキングの像～

ワリオは5体のフィギュアを抱えて亜空間へ戻っていった。しかし、ワリオは亜空間を見て驚いた。自分が亜空間を飛び出した時とはまるで景色が違っていた。そこには巨大な都市が出来ていた。タブーが創造神の力を使って創ったようだ。

ワリオマン
「おいおいおい！！ここはどこだよ！？あの巨大な手の野郎がいないじゃねえか！？」

ワリオがきょろきょろと辺りを見回していると、どこからか声が聞えてきた。

Ｃハンド
「我に用があるようだな。」

突然ワリオの後ろからＣハンドが現れた。

ワリオマン
「おお！！探したぜ！！とりあえず見ろよこのフィギュア！！すげーだろ！！5体も連れて来たんだぜ！！こいつらをやるから追加ボーナスくらいよこせよな！！」

Cハンド
「ほお、期待以上だったな。ご苦労だ。だがもうお前に用はない。ここでお前は終わりだ。」

ワリオマン
「終わりか。まあ儲けたは儲けた訳だ！！そんじゃ元の世界に戻ってこの金で遊びまくるぜ！！イヤッホぉーー！！」

ワリオは大金を手にして嬉しそうだ。しかしそんな嬉しさを破壊するセリフがCハンドから飛び出した。

Cハンド
「馬鹿なやつだな。お前はこの街の牢屋行きだ。元の世界に戻す気は無い。そこで一生過ごしてもらおう。」

ワリオ
「え？」

Cハンド
「まずは貴様の力を消し去るとしよう。・・・ハアア！！」

Cハンドはワリオを力強く握り締めた。

ワリオマン
「おい！！なにすんだよ、痛えだろコラ！！おい！！第一に何で俺様が豚箱にブチこまれなきゃならねえんだよ！！」

ワリオはジタバタと巨大な左手の中でもがいたが、言葉を発するのが精一杯だった。

cハンド
「新しいハンターを拾った。お前をこれ以上使うのも悪くないが、お前を使っても成功する確率よりもへまをする確率の方が高いと見た。かと言ってもとの世界に戻してもお前はへまを起こすだろう。それだけだ。」

Cハンドが話し終わるころにはワリオマンはワリオに戻っていた。

ワリオ
「おい・・・、本当に戻っちまったよ…。って！！俺様はへまなんてしねえよ！！馬鹿にするな！！　・・・　ところで新しい人さらいってのはどいつだよ？」

Cハンド
「お前には関係のないことだ。　……と言いたい所だがたった今その新たなハンターが戻ってきたようだな。どれだけの成果を挙げただろうか？」

そのハンターはなんと空から現れた！赤い戦闘機に乗って飛んできた。

そして戦闘機の搭乗口が開いた・・・

???

「待たせたな、Cハンド。とりあえず2体って所だ。」

中から一匹の狼が2体のフィギュア（鳥と天使（ファルコ ピット））を持って現れた。

Cハンド

「紹介しよう。こいつが新米のハンター『ウルフ』だ。お前と違ってヘマを起こすことは無いだろう」

Cハンドはワリオに少し得意げに紹介した。

ウルフ

「よろしくなデブ。おい、Cハンドから聞いたぜ？おまえ馬鹿だからここで一生豚箱行きらしいな。なかなか似合ってるぜ。豚野郎！！」

ワリオ

「フガ～～～～！！俺様を馬鹿にしたなあ！！そもそも俺様なんて5体もフィギュアを持ってきたんだぜ！！所詮お前みたいに2体しかもって来れないようなポンコツとは格が違うんだよ！！」

ワリオはウルフのイヤミの効いた発言に腹を立たせていた。

ウルフ
「フン！だが俺も2体で終わる男じゃねえ。おっと、そろそろオマケが来る頃だ。上を見な！」

ウルフはそう言って上空に目を向けさせた。　すると・・・・・・、

ドゥォグァアアアアアアン！！！

上から何か巨大な金属の塊のようなものが落ちてきた。その巨大な物体は燃えていて、煙を上げていてあまり容姿を確認出来なかったが、何処と無くウルフが乗ってきた戦闘機と似ていた。

Cハンド
「どういうことだ？」

ワリオ
「お前は普通に持って来れないのか！？やっぱりぽんこつだぜ！」

ウルフ
「まあ簡単に言うと、スタジアムに居たこの鳥やら天使を連れてこようとしたら、キツネがガキ共と一緒に戦闘機にのって追いかけてきたからよ、俺はあの戦闘機を撃墜してやったって訳だ。」

そうウルフが言うと戦闘機らしき物体の中から何から出てきた。

？？？
「ネス、リュカ無事か！？」

？？？

「う、うん。僕は何とか。それよりフォックスさんは大丈夫？」

？？？

「僕も無事。とりあえずフィギュアにされたピットさんとファルコさんを取り返さないと・・・。」

中から出てきたのは一匹のキツネと二人の少年だった。キツネがフォックスで、少年のうちの赤い帽子を被っているのがネス、金髪の少年がリュカだ。

ウルフ

「見ろ。そこのデブと同じく大量だ。おいＣハンド。こいつらも牢獄送りでいいな？」

Ｃハンド

「まあそれがいいだろう。ではウルフよ、まだ生きてる奴らは牢獄へ、フィギュアは牢獄横の倉庫へとほおりこんで置いてくれ。」

ウルフ

「指図されるのは中々癪だな。しかし軍事強化が条件となれば仕方ないな。ここは任せておけ。」

ウルフは嫌々フィギュア７体と戦士４人を牢獄ほ持って行こうとし

た。だがそう簡単には行かない。

フォックス
「待て！ウルフ！！ふざけた真似はやめてファルコを返せ！！」

ネス
「マスターハンドさんも何でまたこんな事をしてるの？」

彼らは戦闘機（アーウィン）ごと墜落したのにも関わらず無傷で元気だった。

Cハンド
「私はMハンドではない。」

リュカ
「え？Mハンドじゃないの？ところでここってニューポークシティ！？なんで僕はこんな所にいるんだろう・・・」

フォックス
「リュカ、ここを知っているのか？」

リュカ
「あ、うん。みんなが憧れるトカイだよ。でもここってこんなに治安が悪いなんて思わなかった・・・。」

フォックス
「とにかくウルフやあの手を始末しなくてはならないようだな。」

Ｃハンド
「ふ、我を始末だと・・・？何やらこざかしい奴らだな。こうなればウルフ、力ずくで牢へ運べ。」

そう言うとＣハンドは巨大な檻を出現させた。なんと辺りにいた戦士やフィギュアが自動で檻へ吸い込まれて行く！

ワリオ
「うわあああ！！何すんだよ！！」

リュカ
「僕達どうなっちゃうの？」

そしてＣハンドはウルフにそれをウルフェン（ウルフの戦闘機）で無理やり運べと命じた。

ウルフ
「ったく。Ｃハンドの下につくのも楽じゃねえぜ。でもまあ仕方ねえな。そんじゃ、行くぜ！！　ＧＯ！！」

ウルフェンが発進した。ウルフェンはCハンドの力で強化されており、音速よりも遥かに速く空を飛んだ！！・・・が、それがアダとなった。檻はCハンドが瞬時に作り上げたものであったため、あまり丈夫ではなかった。そのため檻がウルフェンのスピードに付いて行けず、壊れてしまった。そしてその壊れ目からフォックスとリュカが落下してしまった。他のフィギュアや戦士はしっかりと運ばれたようだ。

フォックス
「リュカ！無事か！？」

リュカ
「うん。受身を取ったから何とか・・・」

またしても二人は無事だった。

Cハンド
「なんと帰ってくるとは悪運の強い奴らだな。」

フォックス
「あの程度でやられる俺じゃないぞ。たしかCハンドと言ったな。おまえの目的は何だ！！」

フォックスが気合の効いた声で言った。

Cハンド
「Cハンドは仮の姿のようなものだ。我はタブーだ。我が名を明かせば目的など言うまでもなかろう。」

リュカ
「また世界征服する気だよ・・・。」

リュカはフォックスとは対照的にとても怯えていた。

Cハンド
「リュカ・・・。我が名を聞いただけで怖気づくとはある意味面白いものだ。ならばもっと驚かせてやろう。北東を見よ!!」

Cハンドに言われるがまま二人は北東のほうを見た。　すると…!

ガシャァァァン！！

リュカ達が向いた北東の方向で何か家か何かの大きな物が破壊されるような音が聞えた。

リュカ
「うわあああぁ！！何？何なの？」

リュカは腰を抜かしてフォックスの陰に隠れた。そして・・・。

ガシャァァァン！！

また同じ破壊音が鳴り響いた。

フォックス
「本当に何があるんだ！？」

だがそんな破壊音は二人の心配をよそにまた鳴り響いた。

ガシャァァァアン！！

そしてまた、

ガシャァァァアン！！

破壊音は一定のリズムで鳴っていた。だが、リズムは一定でも音の大きさは一定ではなく、鳴れば鳴るほど大きくなっていった。そして気が付くと地面が揺れていた。

リュカ
「うぅ・・・、怖いよォ」

フォックス
「リュカ、落ち着け。怖がっていたら何も始らない。」

怖がってばかりいるリュカをフォックスが懸命に勇気付けようとする。しかしそんことは無駄だった。

リュカ
「う、うん・・・。　でも・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・、うわあああああぁ！！」

フォックスが何を言おうとリュカは怯えた。だが今度はさっきよりも激しい驚き方だった。

フォックス
「今度は一体どうした！？」

リュカ
「あ…、あう・・・」

リュカは怯えて声も出ないようだ。そんなリュカは北東の高い所を指さしていた。だがリュカの指さす先を見てフォックスも驚いた。
（リュカほどではないが）

なんと巨大で奇抜な石像が街を破壊しながらこっちへ向かって歩いて来ていた！

フォックス
「これはリュカが驚くのも無理ないな…。でもあいつって一体？」

Cハンド
「ハッハッハ！！そこの泣き虫のガキ、貴様なら見覚えがあるのではないか？」

Cハンドはリュカを馬鹿にするような言い方でリュカに聞いた。

リュカ
「も、も、も、もしかして、キングの像？」

Cハンド
「やはり見覚えがあったようだな。そうだ。紛れも無くキングの像だ。お前らはあの像に踏み潰されることになるのだ。ハッハッハ！！」

クレイジーハンドはまだ震えているリュカをからかう。リュカはなおさら怯えてしまい、動け無くなってしまった。だが、冷静な者もいる。

フォックス
（くそっ・・・。リュカが危険だ…。とりあえず逃げよう）

フォックスはリュカを抱きかかえて逃げ出した。

Cハンド
「ほお、逃げるとは無駄な事をするものだ。やつは何時までも何処までも追いかけるぞ。諦めるという事も覚えたほうがよいな。」

キングの像はCハンドの言うとおり逃げても進路を変えて追ってきた。だが像のスピードは遅く、フォックスは自慢の俊足で大分距離を開け、念のため細い路地に身を隠した。

リュカ
「あ・・・うぅ、あり…がと・・・ぅ。」

フォックス
「無事でよかったよ。でもそんなんじゃ本当にここで終わっちゃうよ。いつまでもグジグジしてないで何とかしなくっちゃ。」

リュカ
「でも・・・、どうすれば…？」

フォックス
「リュカはあの像のこと知ってるんだよね？ならば倒す方法や何か良いヒントは無いかい？」

リュカ
「えっと、あの、その、ビックリして、ど忘れしちゃって・・・。」

フォックス
「そうか・・・。ならとりあえず落ち着いて深呼吸して。君だってここでネスや戦士の皆とのお別れは嫌だろ？だったら落ち着いて、深呼吸して・・・。」

フォックスは必死にリュカを落ち着かせた。その甲斐あってリュカもやがて落ち着きを取り戻してきた。

・・・が、しかし！

ガシャァァァン！！

フォックス
「マズい。追ってきたか・・・。リュカ…。もう面倒を見てられないな・・・。」

リュカ
(僕なんかがいるおかげでフォックスさんも迷惑がかかってるんだ・・・。僕はいつまでも泣いてなんかいられないんだ・・・。こんなに弱い僕でもやるときはやらなくちゃいけないんだ。よし!!)

リュカ
「フォックスさん!安心して。僕はもうくじけないよ。」

フォックス
「リュカ…!その言葉を待っていたよ!」

リュカから強い言葉が飛び出した。リュカが立ち直ってくれたようだ。

リュカ
「フォックスさん。ぼく、ひとつ思い出した。たしかあいつはとても丈夫でほとんどの攻撃がきかないんだ。でも、倒す方法はあったはずなんだよ!」

フォックス
「本当かリュカ!?その倒す方法って一体何なんだ?」
ここで形勢逆転だ!!フォックスも気が楽になったようだ。だが…

リュカ
「でもその倒す方法が思い出せないんだ…。」

フォックス
「へ?思い出せない?・・・くそっ!仕方ない。今は逃げよう!!」
フォックスは倒す方法が思い出せないため逃げようと考えた。…しかし。

Cハンド
「ハッハッハ!そこまでだな。大人しく見ていたが中々愉快だったぞ。フォックスよ、周りを見てみろ。路地に身を潜めたのがアダだったな。もう逃げ場は無い!!」
Cハンドの言うとおりだった。周りは瓦礫や家の壁で覆われており、目の前にキングの像がいるという絶望的な光景だった。

リュカ

「そんな…」

フォックス
「くそっ！！本当にここまでか…！！」

フォックスは八つ当たりがてら近くの瓦礫を蹴り飛ばした。するとたまたま瓦礫の下から日めくり式のカレンダーが顔を出した。そのカレンダーの日付は『１２／３１』を示していた。

リュカ
（あれ？１２／３１．．．。何か引っかかるな…。１２／３１．．．。この日って確か…。）

リュカ
「あぁ！！思い出した！！フォックスさん！！思い出したよ！」

フォックス
「何がだ！？」

リュカは突然叫びだし、フォックスの質問に答えることもなく、おもむろにそのカレンダーを拾い上げ、カレンダーに祈りをこめた。

リュカ

（そうだ。これだ！！）

リュカ
「喰らえ！！　・・・　大晦日！！！！！」

グワワァアアアン！！

リュカが祈りのこもったカレンダーを真っ二つに破いた！

なんとキングの像が突然見るからに弱々しくなった！

Ｃハンド

「何事だ！？」

フォックス
「奇跡が起きたのか！？」

これにはタブーもフォックスも驚きを隠せなかった。

リュカ
「よし！とどめだ！！」

そういうとリュカはその場に落ちていた石をキングの像に投げつけた。

リュカ
「えいっ！」

コツン。

……ガラガラガラガラガラガラガラガラガラガラガラガラぁ！！！

なんとリュカの石つぶて一発であの巨大な像は崩れてしまった。

リュカ
「やった・・・。ぼく、やったよ！！」

この状況は冷静だったフォックスも理解できなかった。

フォックス

「一体どういうことなんだ？」

フォックスはリュカに問いかける。

リュカ

「あ、そうだったね、まだ説明してなかった。　やつを倒すには大晦日って言うアイテムが必要だったんだ。だから僕はただのカレンダーに祈りをこめて、大晦日って言うアイテムに変えたんだ。それでね、大晦日は相手を極限まで弱らせる効果があるんだ。だからあのキングの像も石ころひとつで倒せたって言うわけなんだ！」

フォックス

「そうか…。そんなアイテムがあるなんて不思議だな・・・。ならばそれがあればタブーを倒すことも出来るんじゃないか？」

リュカ

「いや・・・、でも大晦日は一年に一回しか効果が無いんだ・・・。」

フォックス

「まさに大晦日だな・・・。とりあえず今は牢屋にいるネスやフィギュアを助けに行こう。ここで油を売っていても仕方が無い。たしか牢屋はあっちだったはずだ。行こう！」

何だかんだリュカもフォックスも嬉しそうだ。しかしそんな状況が気に食わない者もいる。

Cハンド
「おのれ・・・。こうなればウルフと共に雇った奴の出番だな。こざかしいキツネ共め。思い知るがい
い・・・。」

その頃亜空間の牢獄では…

ウルフ
「ほらよ!!今日からここがお前らの部屋だ」

ウルフェンが牢獄に到着した。その牢獄は縦横約5?四方と狭く、しかもとても汚れていた。

ワリオ
「くそぉ!!俺様はこんな所嫌だぞ!!俺様の家くらい立派な牢獄

はねえのかよ？」

ネス
「あるわけないよ．．．。でも本当にこんなところ嫌だよ！」

ウルフ
「ごちゃごちゃ言うんじゃねえぞコラぁ！！フィギュアになりたいってのか？」

好き勝手言っていた二人だがウルフから喝が入り、静まり返った。

ネス
「そんな．．．」

ウルフ
「ったく、うるせえ奴らだぜ。あとはガキが一人とあのキツネだったな．．．。」

ウルフは引きずって来た檻を確認した。しかしそこにリュカとフォックスはいなかった。

ウルフ
「あぉ？居ねえぞ？．．．．．．．チクショウ！どっかで落としたみ

たいだな・・・。また捜さねえとならねえのか・・・。しゃあねえ、行くか」

そう言ってウルフはフィギュアを無造作に倉庫へ投げ込み、ウルフェンに乗って飛び立って行った。

ワリオ
「行ったか・・・？」

ネス
「うん。多分・・・。」

ワリオとネスはウルフがこの場を去って行ったかを格子越しに確認した。特に意味は無いが・・・。

そのとき後ろから声がした。

？？？
「ワリオ・・・、お前もこっちに来たのか…。」

二人はさっと振り向いた。するとそこには巨大な右手が居座っていた。マスターハンドだ。

ワリオ
「うわ！！ビックリしたぜ！！脅かすなよ！！・・・ってなんでお前がこんな所にいるんだよ！？」

ネス
「確かあなたはＭハンドさん！？なぜ貴方までこんな所にいるの！？」

Ｍハンドはこれまでの自分の経緯とワリオの経緯を説明した。

ネス
「そんな・・・、タブーがまた侵略を始めたってことでしょ・・・？」

Ｍハンド
「無論。そういうことだ。」

ワリオ
「で、お前は何でこんな事になったんだ？」

ワリオはネスを指差しながら言った。

ネス

「あ、僕？まだ言ってなかったね。
僕、空中スタジアムで試合を見てたんだ。
そしたら選手がぜんぜん出てこなくって、どうしたんだろうと思ったら赤い戦闘機（ウルフェン）が飛んできて、中からウルフが出て来たんだ。
そしたらリュカがＰＳＩで『助けて！』って僕に言ってきたんだ。
　だから僕はスタジアムの内部に入っていったんだ。
そしたらリュカと一緒にいたピットさんがフィギュアにされちゃってて、もうリュカもフィギュアにされちゃうって所でファルコさんがどこからか飛んで来てリュカを庇ってフィギュアにされちゃったんだ。
そしたらフォックスさんがどこからか飛んで来て、青い戦闘機（アーウィン）でウルフに砲撃したんだ。
ウルフはその砲撃にひるんで、フィギュアを持って退散したんだけど、僕とリュカとフォックスさんはフィギュアを取り返すためにアーウィンに乗って追いかけたんだ。
そしたら返り討ちにあって・・・、あとはこの通りってわけなんだ。
」

ワリオ
「ウルフってひでえ奴だな。」

Ｍハンド
「そなたも人のことは言えぬだろう。だがそんなことを言っても仕方ない。そこでだ！そなたらに頼みがある。」

ワリオ&ネス
「頼み？」

Mハンドの言葉に2人は不思議そうに聞き返した。

Mハンド
「そうだ。まずはこれを見よ。」

Mハンドは手の内から何やら光る玉を取り出した。

ネス
「それって・・・、スマッシュボール？」

Mハンド
「そうだ。少し長くなるが聞いてくれ。」

Mハンドはそう言うと話し始めた。

Mハンド
「私の言う頼みとはほかでもない。
このスマッシュボールを使って奴(タブー)の計画を打ち砕くということだ。
実はこのスマッシュボール、タブーがワリオを強化したときに使った余りだ。
奴は我の前にこれを落としていった。
だから我はこれを使って世界を元に戻せないかと考え、スマッシュ

ボールの力を我に取り入れた。
すると一時的にだが創造神の力が戻ったのだった。
我は力のある間にスマッシュボールを生産し、１つだったスマッシュボールを２つに増やし、効果が切れたなら、作り上げたスマッシュボールを使い、また力を取り戻し、というのを繰り返し、スマッシュボールを４０個近くまで増やしたのだ。
だから我は戦士たちにスマッシュボールを渡し、戦士たちの協力を得たい。
だか、しかし我はお前たちの世界に行くほどの力は戻らなかったのだ。
そこでだ！そなたらにスマッシュボールを渡しに行ってもらいたいのだ。
我は自らの手の中に戦士たちへの世界の入り口を開いた。
ここから戦士たちの世界へ潜り込み、スマッシュボールを戦士たちに配ってきてくれ。
というのが我の頼みだ。どうか聞き入れてくれ。」

Ｍハンドはそういって手を開き異世界への入り口を2人へ見せた。

ワリオ
「まあ行ってやってもいいけど、なんで自分の体に穴開けちまったんだよ？」

Ｍハンド
「この牢獄はタブーの力が強く、牢獄の中に入り口を開くのは不可能だ。だから自らの手の内に開いたのだ。」

ネス
「僕もそういうことなら行くけど、もしここにタブーが来たら？」

Ｍハンド
「そのときは上手い事たぶらかせば良い。ところでネスよ、そなたはＰＳＩが使えるのだろう？」

ネス
「う、うん。まあそうだけど何で？」

Ｍハンド
「行き先でアクシデントや問題があったなら、そなたのテレパシーで伝えてくれ。我も何か策を練る。」

ネス
「分かった。じゃあ行って来る。一旦お別れだけど、どうか無事で・・・。」

ネスはスマッシュボールを受け取った。

Ｍハンド
「頼んだぞ。そなたらの分も入っているからな。」

ネス
「ＯＫ！」

二人はＭハンドの手の中へ行こうとした。すると

Ｍハンド
「おっと言い忘れていた。ワリオよ、間違えても持ち逃げしたり、売り捌いたりはせぬ様にな。」

ワリオ
「分かってるよ。」

そう言って二人は異世界へと旅立った。

そのころウルフは…

ウルフ
「チクショウ。どこ行きやがったんだよ・・・」

ウルフは徒歩でリュカとフォックスを捜していた。ウルフェンでは捜しにくいようだ。

cハンド
「何をしている？」

ウルフの前に突然Cハンドが現れた。

ウルフ
「うぉっ！！いきなり出てくんじゃねえよ。ビックリするだろ」

Cハンド

「で、何をしている？」

Cハンドはウルフの話なんて聞いていなかった。

ウルフ
「どうしたか？フォックスの野郎と金髪のガキがどっか行っちまったんだよ！」

Cハンド
「そうか、そんなことだったのか。あやつらなら、これから始末する所だ。ほかの仕事は出来ているのか？」

ウルフ
「まあ一応な。ほかの野郎は労屋にぶち込んでおいたぜ。」

Cハンド
「そうか。だが何か嫌な予感がするな。牢屋を見て来るとしよう。」

ウルフ
「大丈夫だって言ってんだろうよ。ウォッと！」

Cハンドはウルフと共に牢屋までワープした。

ウルフ
「何だよ、俺も一緒にワープかよ。」

ウルフはタブーの心配性に少々うんざりしていた。だがタブーは牢屋を覗き込んでいた。

Cハンド
「待て！！どういうことだ！！」

タブーは牢内を見てウルフを怒鳴りつけた。

ウルフ
「なんだよ？・・・・・・・・・・・・あぁ！？」

初めは呆れながら返事をするウルフだったが、ウルフも牢内を見て驚いた。

牢内にはぐったりと倒れたマスターハンドしかおらず、ネスやワリオはいなかった。そしてマスターハンドの横に何か指ビームで書かれていた。2人はそれを黙読した。

『ワリオ、ネス、ウルフ、なぜこんなことに？

我は止せと言ったはずだ。
３人で力を合わせて亜空間から逃げ出すなど戯けた事を．．．
もしここにだれか戦士が訪れるなら落ち着いて読んでくれ。
我の寿命はそう長くない。もう生きる力も失い、いずれ死すだろう。
そんな中、ワリオとネスがここに投獄された。
投獄したのはウルフだ。ウルフは軍事強化のために彼らを投獄した。
ウルフはタブーという悪に雇われていた。
そしてワリオとネスは抜け出すためウルフに、
「おまえも強化された兵器を持ち逃げすればよい」
と、持ちかけ、３人でここを出て行ってしまった。
そんなことをしてもタブーの怒りを買うだけだと我は言った。
だが３人は聞かずに行ってしまった。
もしここへ来る者が居たならばこの３人（特にウルフ）とタブーを止めてくれ。』

ｃハンド
「ウルフ．．．。」

ウルフ
「おい待て！！俺はこんなことしちゃいねえぜ！？ここに書いているのは真っ赤な嘘だ！！」

Ｃハンド
「黙れ！！ワリオやネスを逃がすことが出来るのはお前だけだ！！」

ウルフ
「本当に俺は何もしてねえ！」

Cハンド
「お前を雇った我が馬鹿だった。お前も狐共と共に始末するのみだ！！」

タブーとウルフの言い合いは終わらない中死んだふりをいていたMハンドは小さく笑った。

Mハンド
（ふう・・・。上手く行ったな。これでネスとワリオは無事に行くだろう。）

その時フォックスとリュカがワリオやネスを助けるために牢屋へやってきた。

リュカ
「牢屋が見えてきたよ！」

フォックス
「早い所二人を助けよう！」

2人が来たことに驚いたタブーとウルフは思わず言い合いをやめた。

Cハンド
「なんと！こんなタイミング良くやってくるとは・・・」

フォックス
「お前は・・・！」

リュカ
「タブー…。」

だがタブーを見たフォックスとリュカも驚いていた。

ウルフ
「なんでおまえらがこんな所に戻ってきたんだよ！？」

フォックス
「みんなを取り戻すためだ！」

ウルフはフォックスに声をかけたがタブーに一喝されてしまう。

Cハンド
「ウルフ！！おまえは黙っていろ！！　フォックス、リュカ、さっきは失敗だったが今度こそは死んでもらおう。いでよ！！アンドロフ！！」

そう言うとタブーはアンドロフと呼ばれる板で作られた巨大な顔だけの怪物を呼び寄せた。

アンドロフ
「ファ、ファ、ファ。我はベノムの皇帝アンドロフぞ。ウルフ、フォックス、久しぶりだ。」

フォックス
「アンドロフ！？何故お前がここに？」

リュカ
「え？え？何なの！？」

相変わらずリュカはおびえていた。

アンドロフ
「そんなことお前にもそこの狼にも関係ない。おい、そこの左手よ、我はそこの狼と狐と子供を倒せばよいのか？」

Cハンド
「そうだ。余計な挨拶は不要だ。早い所その3人を殺れ。それだけだ。さらば獣共」

Cハンドは3人を指さしながら言った。

アンドロフ
「そうか。ならば殺るとしよか。死んでもらうぞ獣共〜！」

フォックス
「リュカ。奴はアンドロフ。口から大量の板を吐いて攻撃してくる。それ以外には特に何もないが板の威力は高く、当たれば一溜まりも無いぞ。油断するな！」

リュカ
「え！？そんなこと言われても．．．って危ない！！」

リュカとフォックスが話してる間にもう既にアンドロフの攻撃は始まっていた。

フォックス
「くそっ！相変わらず厄介だな．．．。だけどやるだけやってやる！！ブラスター！」

フォックスはアンドロフが吐く板を掻いくぐり、ブラスターを放った。

リュカ
「僕もやってみるよ。ＰＫサンダー！」

リュカもフォックスに続いてＰＫサンダーを放った。

ピュンピュン！！　ビリビリビリ！！

フォックス
「どうだ・・・？」

アンドロフ
「フォ、フォ、フォ。それで攻撃をしているつもりなのか？」

アンドロフの言葉が意味するとおり２人の攻撃は何も意味を成さなかった。

フォックス
「くそっ！やはりアーウィンが無いと駄目か・・・。」

リュカ
「え！？アーウィンって戦闘機だよね？」

フォックス
「そうだ・・・。奴にはアーウィンを2台用いてやっと勝てるほどだ…。徒歩で攻めて敵う訳が無い・・・」

リュカ
「そんなぁ・・・、」

アンドロフ
「フォ、フォ、フォ。そうと分かれば大人しく死ぬが良い。」

アンドロフは2人の心配をよそに高笑いをしながら攻撃を続ける。

アンドロフ
「ぬぉ？今我は狐と子供しか見てなかったがそこに何か狼がいるではないか。すばしっこい狐どもは後にして、こやつから逝かせるとしよう。」

アンドロフは標的をウルフに変えた。ウルフの前に無数の板が飛んで行く。しかしウルフは動かない。

フォックス
「ウルフ？　・・・　おい！？どうしたんだ！？」

ウルフ
「何だ？お前に心配される筋合いは無えよ。俺はこのまま死ぬだけだ。」

Cハンド
「ハッハッハ！！我の敵に回る者の宿命だ。貴様はすねているだけだろうが、我の計画通りだ。そのまま死ぬが良い。ハッハッハ！！」

Cハンドの言うとおりウルフは拗ねているだけだった。そして拗ねているウルフの顔に一枚の巨大な板が激突し、ウルフは吹き飛んだ。

ウルフ
「ウグッ・・・！」

アンドロフ

「ファ、ファ、ファ。馬鹿な奴だ。まだ生きてるみたいだが死んだも同然だ。やはり狐共を先に潰すとしよう。」

ウルフ
（おのれ・・・、今に見てろ。スターフォックスを倒すのはこの俺だ！あいつの好きにはさせねえぜ！！）

アンドロフは標的をまたフォックスとリュカに戻し、2人に板を吐きつけた。

フォックス
「くそっ！やはり戦闘機が無いと無理だ！」

リュカ
「そんなこと言っても戦闘機なんてどこにも無いよ～。」

2人は何も出来ずに逃げ惑う。

Cハンド
「アンドロフよ。そろそろ奴らも逃げ疲れる頃だ。ラッシュを掛けよ。」

アンドロフ

「了解だ。」

Cハンドの言う通りリュカもフォックスも逃げ疲れてぜえぜえ言っていた。だがアンドロフの攻撃は強まって行く。

だがその時！！

ズキュウウウゥゥン！！

アンドロフ

「ぐわぁ！」

どこからか強烈なレーザー砲が放たれ、アンドロフの眉間に命中した。

Cハンド
「何事だ！？」

皆が辺りを見回すと一台の赤い戦闘機が宙を舞っていた。そしてその戦闘機（ウルフェン）はフォックスとリュカへ近づいて行き、ウルフェンの搭乗口が開いた。

ウルフ
「乗りな。」

リュカ
「え？」

フォックス
「ウルフ・・・、どういう風の吹き回しだ？」

ウルフ
「とりあえず乗れ。死ぬぞ。」

ウルフの言う通りフォックス達は今すぐに死んでもおかしくない状況だった。なぜなら眉間を打ち抜かれたアンドロフが怒りながら板を飛ばして来ていたからだ。

アンドロフ
「ぬおお！！この腐れ狼め！皆殺しにしてくれる！！」

フォックス
「そうか、済まないな…。」

フォックスはそう言ってするりと乗り込んだ。

ウルフ
「ガキ！お前もだ！！乗れ！」

ウルフはリュカを睨み怒鳴りつけた。

リュカ
「あ、え？ぼ・・・ 僕も？」

ウルフ

「そうだ早くしろ！！殺すぞ！！」

リュカ
「あ・・・、はい！」

リュカはウルフに怒鳴られ慌てて乗り込んだ。

ウルフ
「上昇だ！！」

そしてウルフェンはフォックスとリュカを乗せて上昇しながらアンドロフの板をかわした。

ウルフ
「チクショウ。あぶねえ野郎だな。」

ウルフは余裕の見える台詞を吐いて飛行していた。もちろんこの間も板攻撃はとまらない。

フォックス
「な、なあウルフ。どういうことだ？　さっきまでふて腐れてたのに急に反撃なんかはじめて。」

ウルフ
「ケッ。俺はただお前がほかの奴に倒されるのが気に喰わねえだけだ。お前を倒すのは何があってもこのウルフ様だ！で、このガキはおまけみてえなモンだ。」

フォックス
「（何だかんだでウルフって人情深いな．．．）ウルフ、いくらなんでも戦闘機一機じゃ無理だ。俺が一度アンドロフを倒した時だってファルコと俺でアーウィン2機で何とか倒したんだ。だから流石に厳しくないか？」

ウルフ
「今こいつはあの左手の力で性能が上がってんだよ。これならあんなアホズラ野郎なんて楽勝だぜ。」

ウルフはそう言うとわざとらしくCハンドの横の建物を砲撃してCハンドの気を引き、こっちを見たときに中指を立てて挑発して見せた。

Cハンド
「む？どういうことだ？．．．．．．．．そうだったな。ウルフの戦闘機の性能を上げたままだったな。早い所戻さねばアンドロフがやられてしまうではないか。おのれ！！　アンドロフ！もっと攻撃を激しくしろ！！」

アンドロフ
「もう限界だ。」

Cハンド
「くっ。役立たずめ！！仕方ない。自ら出向いて捕えるまでだ！！」
Cハンドはウルフェンを捕まえようと考え、ウルフェンへ突っ込んでいった。

フォックス
「お、おい！タブーのやつがウルフェンを捕まえに来たぞ！」

ウルフ
「だからなんだ！？一番面白え所じゃねえか！」

リュカ
（これが面白いって、この人ってちょっと凄いな．．．）

ウルフは華麗にCハンドの掴みかかりとアンドロフの板を同時にかわしながらアンドロフに砲撃を加えた。

アンドロフ

「ぐああ！おのれぇぇ！！」

アンドロフはまた怒り、激しく板を吐く。そして・・・

バアアァァァァン！！

アンドロフ

「やっと命中したぞよ！」

Cハンド
「我だ！！」

アンドロフはウルフを狙うもかわされ、仲間うちをしてしまった。

アンドロフ
「おっと済まぬ！」

ウルフ
「そんじゃそろそろとどめと行くか。」

フォックス
「とどめ！？何をする気だ？」

ウルフ
「黙って見てろ。喰らえ！！スマートボム（改）！！」

ドカアアアアアアアン！！！！

ウルフが放ったスマートボムはとても巨大な爆風を巻き起こし、アンドロフを焼き尽くした。

リュカ
「すごい威力・・・。」

フォックス
「一溜まりもないな・・・。」

そして爆風が収まる頃にはアンドロフは跡形も無く焼き尽くされていた。

ウルフ
「決まったな。」

フォックス
「ウルフ見事だ。素晴らし過ぎるよ！でもとりあえず亜空間を出よう。ここにいても何も無い。フィギュア達には申し訳ないけど一旦出よう。」

ウルフ
「言うと思ったぜ。ここはお前に従って出るのが一番みてえだな。そんじゃ行くぜ！！」

そう言って三人を乗せた戦闘機（ウルフェン）はどこからか亜空間を抜け出して行った…。（亜空間の出口はウルフが知っていたようだ。）

そんな時、亜空間を出る寸前に3人はある声を聞いた。

Mハンド
「ウルフ、フォックス、リュカ、よくぞやってくれた。

我が名はマスターハンド。あの牢獄にいた巨大な右手だ。
テレパシーでそなたらへ声をかけている。
言うまでもなくこの世界はタブーによって侵略されかけている・・・。
我は今世界を救うためにそなたらの様な戦士達へ協力を求めている。
ウルフ、先ほどは済まぬ事をした。
ネスやワリオを逃がしたのは我だ。
それも世界を救うための活動だ。

これからもタブーは侵略活動を続けるだろう。
あの手この手でそなたらを葬ろうとするだろうが
なんとか生き延び、タブーの野望を撃ち砕いてくれ・・・」

リュカ
「今、何か声がしたような・・・。」

フォックス
「俺もだ。マスターハンドのようだな。」

ウルフ
「俺も聞いたぜ。よく分かんねえけど貴様との決着は後になりそうだな。」

フォックス
「そうだな。」

その頃1人亜空間に残されたタブーは…

Cハンド

「くそっ！！何故だ！？なぜ計画がうまく行かぬ？こうなればまた新たな手を打つまでだな・・・。ウルフの奴め！！我はいつまでも諦めぬぞ！今に見てろ。この世界は我の物だ。グワッハッハッハ！！！」

タブーは一人高く笑うのだった……。

第４章　～某星の皇帝とキングの像～（後書き）

第４章もついに終了しました！！
てか長かった・・・。

タイトルにアンドロフ（某星の皇帝）やキングの像が入ってるから
この二体を出さないことには終われなくなってしまい
気が付かば４章だけで１万３千字ｏｒｚ

とにかく読んでくれてありがとうございました！！
（え？読んでない？（笑））

引き続き応援お願いします＾＾

第5章　～ガノンドロフ始動…～

マリオ
「ピーチ、ゼルダ、どうですか？」

ピーチ
「とりあえずゲームウォッチさんが審判さんのお手伝いの所にいたわぁ。」

ゼルダ
「スネークさんが倉庫のダンボールの中に紛れていたからつれてきたわ。後は少し離れた所でガノンドロフがスタジアムを睨んでいたんだけど、厄介なことになりそうだから、ほおって置きました。」

スネーク
「マリオ、話は聞いたが大変なことに成ったらしいな。おまえは誰か連れてきたか？」

マリオ
「まあ、ディディーがいたから声をかけたんだけど、ドンキーを呼んでくるって言ってどこかに走っていったんだ。」

ここは空中スタジアム。マリオ、ピーチ、ゼルダがワリオにさらわれた戦士たちを取り戻すために、亜空軍事件に関わった戦士たちを集め対策を練っている所だった。

そしてピーチは平面世界の住人である真っ黒でペラペラなＭｒ．ゲーム＆ウォッチを、

ゼルダは数々の危険な任務をこなして来た長身の男ソリッド・スネークを連れてきたのだった。

スネーク
「そうか．．．。ところで俺たちは何をすればいいんだ？任務の内容は決まっているのか？」

マリオ
「まだ未定だ。だから何とか皆に方法を考えて欲しいんだ…。」

ピーチ
「亜空軍事件のときはどうやって戦士たちを助けたんでした？」

スネーク
「たしか・・・、あの大王の悪趣味なブローチのお陰ではなかったか？」

ゼルダ
「でも今はデデデさんもいない・・・、やはり別の方法を考えなくては…。」

みんな
「う～ん・・・」

皆が深く考え込んでいるそのとき…！

ディディー
「うっき～！！　ドンキーが来たよー！！」

ドンキー
「ウホッ！マリオ、ピーチ、更にはスネークさんやゼルダさんも久しぶり！」

二匹の猿がやってきた。

スネーク
「間が悪いな・・・。」

ゼルダ
「仕方ないですよ」

スネークはディディーに聞えないよう小さく呟く。そしてゼルダが小さくフォローする。
しかしディディー達はそんなのは分からずはしゃぎ続ける。

ディディー
「ねえねえスネーク！！おいら今日このスタジアムの大会で優勝したんだよ！！すごいでしょ！」

ドンキー
「なあピーチ、ゼルダ！！君達もすごいと思うだろ！？さすがは俺の相方だよ！！」

マリオ
「ディディー、それは対戦相手が一人も出て来なかったからだろ。」

ディディー
「うきゃぁ～。そっか～・・・。」

ドンキー
「で、俺達は何をすればいいんだ?ディディーに呼ばれたは良いんだけど、ディディーが優勝した話で盛り上がっちゃって・・・、目的を聞いてなかったんだ!」

マリオ
「はぁ〜・・・。」

頭を掻きながら苦笑するドンキーにマリオが説明した。

ドンキー
「なるほど・・・。とにかく今は方法を考えないとならないんだ〜。」

スネーク

「そういうことだ。三人寄れば文殊の知恵と言ったところだ。」

ディディー
「ならもっと戦士を集めようよ！！」

ゼルダ
「もうガノンドロフしか居ないわ。あんなの呼んでも厄介になるだけです・・・。」

スネーク
「待て！！確かに奴(ガノン)は今は不要だ。だがとにかく人を集めるならコイツが役に立つんじゃないのか？軍隊もそうだが人が多いほうが強いというのは鉄則だぞ？」

スネークはＭｒ．ゲーム＆ウォッチを指して言った。

マリオ
「そうか！影虫を使えばとりあえず仲間の数は増やせるぞ！」

ピーチ
「でも増やしてどうするの？」

スネーク

「おそらくまたワリオが俺らを狙いに来るだろう。その時に味方が多ければ皆で拷問することも出来る。とにかく仲間は多いほうが有利だ。」

ゼルダ
「なるほど・・・。とりあえず試してみましょう。ゲームウォッチさん、プリムを一体よろしいかしら？」

ピッ！ピッ！ピッ！

ゲームウォッチは効果音を鳴らしながら飛び跳ねた。「ＯＫ！」と言っているようだ。

そしてゲームウォッチは体から奇妙な黒い粒をあふれさせてプリムを作り上げた！

ピーチ
「すごいわ！！本当に出来たようね！」

マリオ
「でも何か変だぞ？」

マリオの言うとおりプリムはどことなく変だった。無意味に走り回っては転んだり、その場でくるくる回ってふらつき、ゲームウォッ

チにぶつかったりしていた。

スネーク
「奴は生きる目的が分かってないようだな・・・。何か命令が必要なようだ・・・。」

ピーチ
「あら、そうなの？じゃあでんぐり返し！！」

ピーチ
「……あら？」

プリムはピーチの言う事を無視して走り回っていた。

ドンキー
「どうした？」

スネーク
「もっとカ強い者の命令しか聞えない様だな・・・。あいつなら出来るかもしれない…。」

ゼルダ
「！？」

ゼルダはスネークが指し示す方向を見て驚いた。その方向の遥か奥にはスタジアムの片隅から中央を睨む大男が居た。

ゼルダ
「正気ですか・・・？」

スネーク
「ああ、奴にしか出来ないだろう。２ヶ月前の事件でもあいつは亜空軍の司令官を勤めていただろ。だから奴の言う事なら聞いてくれるだろう。」

マリオ
「でも今回の事件もタブーが黒幕のようなんだろ？フィギュアを集めるのはタブーしか居ないし。ガノンドロフも何か絡んでいたら厄介なことになりそうじゃないか？」

スネーク
「それなら皆でかかればいい。リンチを好んでいる訳じゃないが、やはり数は強いぞ。」

ディディー
「じゃあオイラ呼んでくるよ！皆ここで待ってて！！」

スネーク
「数では勝っているんだ！！お前が一人で言っては意味が無いだろ。
」

ディディー
「うきゃぁ～。そうだった．．．」

ゼルダ
「では、行きましょう。」

そしてゼルダ達はガノンドロフの交渉へ足を進めた．．．。

ガノンドロフ
「くそっ！！リンクが出てくるのではないのか！？」

ガノンドロフはリンクの登場を待っていた。

ガノンドロフ
「出てきた所を潰しにかかろうと思ったのだがな．．．」

ゼルダ
「ガノンドロフ！！」

リンクの登場が無いことに苛立つガノンドロフにゼルダが声をかけた。

ガノンドロフ
「ぬ！？誰かと思えばゼルダ！何のようだ？征服されに来たのか？」

ゼルダ
「まさか。貴方は何故ここに居るのですか？」

ガノンドロフ
「ふん。貴様とリンクを捕らえて世界を征服しようとしている所だ。だが見てのとおり奴が出てこないそういう訳だ。」

スネーク
「口を挟む様で悪いが、お前はこの戦士がフィギュアにされる事件に何も関わっていないのか？」

ガノンドロフ
「どういうことだ？」

スネーク
「つまりだ、お前はリンクを初めとする戦士が消えている事に関わっていないのか？」

ガノンドロフ
「関わっていたらこんな所で油は売っていない。」

スネーク
「そうか・・・。それは良かった。」

ガノンドロフ
「良かったとはどういうことだ？」

ゼルダ
「実は頼みがあるのです。ゲームウォッチさんが生み出したプリム等の影虫で構成されている生物に指示を与えてもらいたいのです。」

ガノンドロフ
「何故だ？」

スネーク
「そこからの説明が必要か・・・。」

ゼルダ達は今までの経緯をガノンドロフに説明した。

ガノンドロフ
「成程・・・、あの半透明の逆襲が始まったというわけか…。」

マリオ
「そういうわけなんだ。少なからずお前が悪い奴だということは聞いているが、お前もタブーの存在は邪魔だと思うだろう？」

ガノンドロフ
「確かにマリオの言うことは否定出来んな・・・。いいだろう、どの道リンクも我が手中に収めなくてはならぬ。俺もお前らと共に行くとしよう。」

ピーチ
「まあ！ありがたいわ♪　じゃあ試しに命令を与えてみて下さるかしら？」

ピーチは遠く（ゲームウォッチが影虫を出した位置）にいるプリムを指さして言った。因みにその時プリムはジャンプをしながら自分の頭を蹴っていた。

ガノンドロフ
「あいつは何をしているんだ?・・・ まあいいだろう。『さあ!!こっちへ来い!!!』」

ガノンドロフは低く力強い声でプリムを呼びつけた。するとプリムはラジコンで操られたかのごとくガノンドロフのもとへ走って来た。

ディディー
「うわ〜!!すっごいな〜!!本当に来たよ!」

ガノンドロフ
「容易い事だ。だがこれからどうすれば良いのだ?」

マリオ
「確かにどうしようか・・・。」

マリオたちはまた振り出しに戻ってしまった。・・・ が、しかし!

ドンキー

「あの～。提案なんだけど、ここのスタジアムにシンプルゲームのコーナーがあったよね？」

ドンキーが少し静かに言葉を発した。

マリオ
「それがどうした？」

ドンキー
「そこって部屋を何箇所か抜けたら終点に続いているんだよね？」

ピーチ
「そうよね。それで？」

ドンキー
「そこって確かマスターハンドの部屋じゃなかったか？」

みんな
「それだ！！」

皆がドンキーの意見に賛成した。

マリオ

「そうか！！マスターハンドなら何か知っているかもしれない！！」

ディディー
「ドンキー何か冴えてるね！」

ドンキー
「ウホッ！昨日はバナナがいっぱい採れたから今朝４００本食べたんだ！そのお陰だよ！！」

ガノンドロフ
「お前は馬鹿か？」

ディディー
「違う！！バナナを食べると頭が良くなるんだい！！そんなことも分からないのか！！なんならお前もバナナ食うか？」

ガノンドロフ
「俺が馬鹿だと言いたいのか？」

ガノンドロフは少し怒った様に言った。しかし！

ゼルダ
「まあ待って、とりあえず止めにしましょう。変に喧嘩なんてして

も仕方ないですわ。今は早く行きましょう。世界が掛かっているのかもしれないのですから。」

すぐにゼルダがなだめた。

ディディー
「そうか～。ゼルダの言うとおりだよね！！みんな何かゴメ～ン。」

ガノンドロフ
「世界が掛かっているか・・・。まあもうすぐ俺の物になるのだから早く行かなくては汚されてしまうな。ここは従って行くとしよう…。」

マリオ
「よく分かんないけどこれで良いか。じゃあ行こう！！」

そしてマリオ達はスタジアム内部へと向かっていった・・・。

スネーク
「ここだな・・・。」

スネーク達はシンプルゲームのコーナーに着いたようだ。

ピーチ
「それじゃあ行きましょう。」

そしてピーチ達は一つ目の部屋へ転送された。

するとリンクが現れた。

ガノンドロフ
「なんだ！奴はここに居たのか！？」

マリオ
「これはマスターハンドが作り上げた偽者だよ。とりあえず倒さないと進めないわけだ。さっさと倒そう。」

そしてマリオ達は９：１（プリム含む）で襲い掛かると言う反則的な戦い方によって現れる敵達をどんどんなぎ倒し、ミニゲーム『ターゲットを壊せ！』に至っては３秒でクリアすると言う物凄い速さで終点まで突っ走った。

そして彼らは終点にたどり着いた・・・

第5章　～ガノンドロフ始動…～（後書き）

５章も終了しました！！

前章の１３，０００字に比べたら４，０００なんて短いな～（笑）

ここからもどんどん面白い（といいな．．．）

ストーリーを作って行きたいと思います！！

引き続き応援よろしくお願いします＾＾

第６章　～残酷な少年のポーキー～（前書き）

この小説は主に土日に更新します。

第6章　～残酷な少年のポーキー～

？

「う～んここはどこだ・・・？」

たった今どこか大きな城の中庭のような所で青いハリネズミが目を覚ました。

ハリネズミ

「わぉ！俺っていつの間にこんな城に来たんだ？」

ハリネズミは城に来た覚えが無いらしく状況が理解できなかった。

ハリネズミ

「俺ってどうかしちゃったのか？何も思い出せないな…。……ん？なんだ？」

腕を組んで考え込むハリネズミの目に眠り込む黄色いネズミの様な生物が映りこんだ。

ハリネズミ

「Ｈｅｙ！起きてるかい？」

ハリネズミは黄色いネズミのような生物に話しかけるた。するとその生物はゆっくりと起き上がった。

黄色いネズミ
「ピ～カ～？」

ハリネズミ
「おっと起きたようだな。ＧＯＯＤ　ＭＯＯＮＩＮＧ！突然で悪いけど何故ここで寝ているんだい？」

黄色いネズミ
「ピカピ？」

ハリネズミが話しかけた。すると黄色いネズミは首をかしげながら鳴いた。

ハリネズミ
「え？あなたは誰かって？俺か？俺はソニック！ソニック　ザ　ヘッジホッグだぜ！！・・・あれ？俺なんで『ピカピ？』から君の言いたい事が分かったんだ！？」

ハリネズミの名はソニックと言うようだ。そしてソニックはまた考

え込む。

黄色いネズミ
「ピッカ！」

ソニック
「ん？『君も一応ネズミだから分かったんだよ！』って言ったのか？そうか俺も一応ハリネズミだからな。ってことはやっぱり君もネズミなのか？」

黄色いネズミ
「ピカ！ピカピ～！！」

ソニック
「そうか。君はピカチュウって言うのか。え？亜空軍事件の時に会った事がある！？悪いな。最後に飛び入りしたもんだからみんなの事あまり知らなかったんだ。まあとりあえずよろしくな！！」

ピカチュウ
「ピカ！」

こうして二匹のネズミはお互いを分かち合った。

ソニック
「ところでこんなところで何してんだ？」

ピカチュウ
「ピ？・・・・・・、ピカ？」

ソニック
「そっか…。君も分からないか・・・。じゃあとりあえずそこらを探し回ってみようぜ！！」

ピカチュウ
「ピカピ！！」

そして2人は辺りを駆け回り、何か手がかりを探し始めた。

ピカチュウ
「ピッカぁ～。」

ソニック
「Ｏｏｐｓ！ついて来れないか？モタモタしてると置いてくぜ！！」

ソニックが爽やかに親指を突き立てると、ピカチュウは少し怒ったように頬っぺたを膨らませた。

ピカチュウ
「ピッカ！！　ピッ！ピッ！」

そしてピカチュウはソニックに負けじと電光石火で駆け回り始めた。

ソニック
「ワォ！！すごい早さだぜ！！いくら俺でも光より早く走るのは難しいぜ！」

そして二人はまた駆け回り始めた。

ソニック
「お～い！何かあったか～？」

ピカチュウ
「ピッカピ！」

ソニック
「なに？『気持ち悪い像があっただけか・・・』俺もそれしか見つけられなかったぜ。」

ピカチュウ
「ピカ～。」

ソニック
「おいおい！がっかりするなよ！また探してみようぜ！！」

ピカチュウ
「ピカチュ！！」

そして二人はまた駆け回り始めた……

ソニック
「ふ～。本当に何もねえな・・・。城の扉も全部開かないな。」

ピカチュウ
「ピッカ。」

ソニック
「じゃ、もう少し走ってみるか！行くぜ！！」

そしてソニックはもう一度走り出した。すると・・・、

ガチャン！！

ソニック
「うわ！何だ！？」

走るソニックの足に何かが引っかかった。

ピカチュウ
「ピッカ！！ピーー！！」

ソニック
「何！？お前もか！！」

ピカチュウの足にも何か同じようなものが引っかかっていた。

ソニック
「くそっ！！何だこれは！？　ハッ！！ネズミ捕りだ！！」

ソニックは足に引っかかる物の正体は分かったものの、中々外れずにもがいていた。

ピカチュウ
「ピッカ！！」

一方のピカチュウはアイアンテールでネズミ捕りを破壊して自由になっていた。

ソニック
「Ｈｅｙ！俺のネズミ捕りも破壊してくれ！！」

ピカチュウ
「ピカピ！！ピッカ！！」

ガチャン！！！

ソニック
「ふ～。助かったぜ！Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ！！」

ピカチュウ
「ピカピ・・・」

ピカチュウはもともと赤い頬をさらに赤くして耳の後ろを掻いている。少し照れているようだ。

ソニック
「でもな～。ネズミ捕りがあるなんてちょっと嫌な予感がするぜ・・・。」

ソニックは何気なくつぶやいた。予感が的中する事も知らずに・・・。

グァシャアアァァァン！！

ソニック
「なんだ！？」

突然城の内部から破壊音が響いた。

グァシャアアァァァン！！
グァシャアアァァァン！！
グァシャアアァァァン！！

破壊音は何度も鳴り響く。そしてその音は徐々に近づいてくる。

ピカチュウ
「ピッカ・・・。」

ピカチュウも不安げな声を上げる。

グワッシャアアアァァァァァン！！！！！

その時！！城の壁が壊れ、城の中から何か出てきた。
出てきたものは8本の足を持つ奇妙なメカだった。

メカの操縦士
「ふ～。せっかく掛かったと思ったのによ～。壊すなんて反則だぜ！」

中には太った金髪の人間が乗っていた。

ソニック
「Ｈｅｙ　ｇｕｙ！お前は誰だ！？何の目的だ！？」

ソニックは尋ねた。

メカの操縦士
「俺様、何様、ポーキー・ミンチ様だ！！目的はお前達をやっつける事だ！」

ソニックが尋ねるとポーキーと名乗るものは偉そうに答えた。

ソニック
「俺達をやっつける！？そんな事して何が楽しいんだ！？」

ポーキー
「クレイジーハンドとか言うやつの命令だ！！
実はな俺、リュカって言う生意気なガキにやられかけて、
脱出不能のカプセルに閉じこもったら出れなくなったんだ。
まあ、どうせ俺はちょっとした事の副作用で不死になったから、
やられても死ぬ事はないんだけどな。
だけど時空を超える事が出来る奴も居るんだ。

タブーって奴だ。
奴は俺をカプセルから出してくれた。
奴は時空を超えてカプセルの中に亜空間って言う別世界を作って
俺はそこから抜け出した。
そしてその後抜け出した俺はまたリュカと戦った。
でも、負けた。そして俺は路頭に迷ったけど、
今度はCハンドが俺を拾ってくれた。
それで俺はCハンドに忠誠を誓う事にしたんだ。
で、命令の内容が
お前らファイターをやっつけるって事なんだよ！！
ちなみにここはデデデ城をモデルとした亜空間だ。
簡単に言うとCハンドの本拠地だ！！」

ポーキーは少し悲しげに自分の過去と今の経緯を語った。

ポーキー
「でもそんなこと言っててもしょうがねえな！！そんなわけで殺させてもらうぜ！！」

ポーキーはそう言ってソニックとピカチュウに突っ込んでいった。

ソニック
「おいおい！そんな悲しいこと言うなよ！せっかくならもっと明るく生きようぜ！」

ソニックはポーキーの突進をよけながら宥める様に言った。

ポーキー
「知ったこっちゃねえぜ！俺はこうするって決めたんだよ！！」

しかしポーキーは聞く耳を持たず突進を繰り返す。

ソニック
「虚しいやつだな。でもこのままが俺達がやられちまうぜ！！行くぜピカチュウ！！」

ピカチュウ
「ピッカ！！」

そしてメカ（ポーキー）との戦いが始まった。

ソニック
「行くぜ！スピンチャージ！！」

ソニックは球体になって素早く体当たりを繰り出した。

ピカチュウ
「ピ～～～カァ！！」

ピカチュウもソニックに続いてロケット頭突きを繰り出した。

キュイィィン！！　ドーン！！

二匹の攻撃は見事に命中した。

ポーキー
「おいおいそんなもんかぁ！？しょっぼい攻撃だな～。そんじゃこっちからも行くぜえ！！」

ポーキーロボには傷一つ付いていなかった。

そしてポーキーはロボについている機械の上のほうからビームを放った。

ビビビビビビ！！

ソニック
「おっと、」

だがソニックとピカチュウは難なく避ける。

ポーキー
「そんなんで避けたと思うなよー！このビームはお前らを追いかけ続けるぜ！！」

ソニック
「何！？・・・　Ｎｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏ！！！」

ポーキーのビームがソニックに直撃した。

ポーキー
「どうだ！！俺様を見くびるなよ！！次はお前だぁ！！」

そしてポーキーのビームの矛先はピカチュウに向けられた。

ピカチュウ
「ピィカァチュウ～！！」

だがピカチュウは追って来るビームよけてビームが出ている所に電撃を放った。

ビぢィィい！！

するとポーキーロボから嫌な音と共に火花が散り、ビームが爆発した。

そしてそのビームは辺り一面に降り注いだ。

ポーキー
「がぁぁぁ！！」

ポーキーは降り注ぐビームの衝撃で意識が飛びかけた。

相対してピカチュウは倒れるソニックを咥(くわ)えてビームから避難していた。

ソニック
「Ｓｏｒｒｙ！助かったぜ！！にしても手強いな。」

ソニックは親指を突きたてピカチュウにお礼を言った。

ピカチュウ
「ピッカ。」

ピカチュウはソニックの言葉にうなずく。

ポーキー
「おいお前らぁ！！よくもやってくれたな！！倍返しにしてやらあ！！」

ポーキーはネズミたちが仲良く喋るのが気に入らないようで、ポーキーはネズミ達に自分そっくりの小型ロボを何体か飛ばした。
そしてそのロボはギクシャクしながら二匹のネズミに近付いて行く。

ソニック
「なんだこりゃ？こんなもの、こうしてやるぜ！！」

ソニックはお得意のスピンチャージでロボ達に突っ込んで行った。

ポーキー
「おっと！一つ言い忘れてたぜ。そのロボには爆弾が仕掛けてあるんだぜ！？下手に刺激すりゃ、ドカンだぜ？」

ソニック
「何！？」

ソニックは慌てて止まろうとしたが勢いが強く止まれない。
そして…！！

ドカン！！ドカン！！ドカン！！ドカン！！

ソニック
「うぐぅ・・・。」

ピカチュウ
「ピッカ！ピカピ！！」

ソニックはモロに被爆してしまい、ぐったりしてしまった。
そんなぐったりするソニックにピカチュウが慌てて近づく。

ソニック
「大丈夫だ。俺は大丈夫だ・・・。ノープログラム・・・。」
ソニックはそう言うとそのまま気を失ってしまった。

ポーキー

「ギャアハハハハハハアアァァ！！こりゃ愉快だな！！自爆してノープログラムでそのままオジャンか！！完全に壷に入ったぜ！！ギャハハハハハ！！」

ポーキーはソニックを戦闘不能にし、一人高らかに笑っていた。

ポーキー
「そんじゃ、とどめと行くかぁ！！・・・・・・・・・、あ？なんだオメェ！？お前もあんな風に殺されてえのかコラァ！？」

ポーキーはソニックに止めをさそうとした。しかしピカチュウがポーキーロボのコックピットに張り付いていた。そして！

ピカチュウ
「ピガーー！！」

ゴロゴロゴローーン！！

ポーキー
「うわっ！何しやがる！？」

ピカチュウはその場に雷を落とした。するとポーキーロボのコックピットの強化ガラスに薄っすらヒビが入った。

ポーキー
「クソォ！やりやがったな！！こうなったら・・・」

ピカチュウ
「ピカァ！？」

ポーキー
「喰らいやがれ！！ＰＫ（ポーキー）スタースストーム！！」

ポーキーはピカチュウを張り付かせたままソニックの遥か真上まで飛び上がり、まさに流星のごとくソニックを踏み潰そうとした。

ポーキー
「こうなったらとりあえずこのハリネズミを殺してからこの電気ネズミを甚振ってやるぜエ！！」

ピカチュウ
「ピ！？ピカァ！？　　・・・・・・ピッ！ピッ！」

ピカチュウはポーキーの言葉を聞くなり、ポーキーロボから手を離して飛び降り、電光石火でソニックの所まで行った。

ポーキー
「何だあ！？わざわざ潰されに来たみてえだな！２匹まとめて潰してやるぜエ！」

ドォシイイイイイィィィィィン！！！

そしてポーキーはそのまま着地した…。

ポーキー
「どうだ！潰してやったぜ！！ざまー見ろ！」

ポーキーは独り言のように言った。

ピカチュウ
「ピッカ？ピッカあ！！」
そんなポーキーの横でピカチュウが元気に鳴き声をあげた。
そして、ピカチュウはソニックを咥えていた。ソニックは静かに目を覚ました。

ソニック
「おっと？もう天国に着いたのか？短い人生だったぜ・・・。」

ピカチュウ
「ピッカ！」

寝ぼけているソニックの目にピカチュウが映る・・・。

ソニック
「ピカチュウ・・・？　は！？俺・・・、生きてる！　そうか。また助けられたのか・・・。済まないな。ピカチュウ。」

ピカチュウ
「ピッカ！！」

2匹のネズミは生きていた。潰されそうになったソニックをピカチュウが命を懸けて救ったのだった。

ソニック
「そんじゃ、後はあいつを倒すだけだな！！」

ピカチュウ
「ピカ！」

そしてネズミ達はポーキーに向き直った。

ポーキー
「くそ！！生きてやがったか！！こうなったら意地でもお前らを殺してやらあ！！」

ポーキーはそう言って飛び上がった。だが・・・、

ソニック
「遅すぎだぜ！！」

なんとソニックはポーキーの上まで飛んでいた。

ソニック
「お前はここで終わりだ！！」

そしてソニックはそう叫ぶなり流星キックを繰り出した。

ばきいいいいいん！！

ソニックの流星キックは見事にコックピットの強化ガラスのヒビに命中し、ガラスを粉々に砕いた。

ポーキー
「うわっ！ヤベえ・・・」

ソニック
「ピカチュウ！任せたぜ！！」

ピカチュウ
「ピガーーーー！！」

ピカチュウはポーキーの真下にいた。そしてピカチュウはソニックの指示を受けるなり、その場に雷を発生させた。そしてその雷は向き出しになったコックピットとポーキーに命中した。

ポーキー
「グギャワァアアアアアアアァァァァーーー！！」

ポーキーロボは落下し、燃え上がった。
必然的にポーキーは燃えていく・・・。

ポーキー
「そんな・・・、何故だ？俺は死なない。不死になったはずだ。俺は死なない、シナナイ、シナナイ、死なないハズなんだ。でも、シニソウダ。体が焼けていく・・・、俺は死なないハズなのに・・・」

ソニック
「時空を超えてこっちに来た事によって不死じゃ無くなったみたいだな。残念ながらお前は終わりだ。」

ポーキー
「俺は・・・、シヌノカ？」

ソニック
「悪いな。俺は本当は人を殺すのなんて好きじゃない。でもお前は俺やピカチュウを殺そうとしたんだ。悪く思わないでくれ。」

もともと不死だったためか、ゆっくり死んで行くポーキーにソニックは切なく語る。

ポーキー
「俺ダッテそうだ。人を殺したくなんか・・・、コロシタクナンカ・・・、」

ソニック
「殺したくなんか無いとは言えないんだろ？俺はお前の詳しい過去は知らないが、それがお前の過去みたいだな。それがお前の人生だ。」

ポーキー
「俺の過去か・・・・・。そう言えば俺には一人だけ友達がいたっけか？ネスって言ったな。アイツもオマエラみたいに狙われる立場だ。今頃死んでるかもしれねえな。このままシネバあの世であいつに会えるのか？　アエルノカ・・・？」

ドォオオオオオオン！！

ポーキーがそう言い残すとポーキーロボが突然爆発した。燃料タンクか搭載していた爆弾に引火したのだろう。そして、爆発が収まる頃にはポーキーの姿は全く無くなっていた。

今まで親に虐待され、友達らしい友達も無く、どこに行っても邪魔者だった、悲しい少年の最期だった。

もちろんこんな過去、ソニックやピカチュウは知らない。

ソニック
「……終わったのか？」

ピカチュウ
「ピッカ・・・。」

ソニックとピカチュウは小さく会話をする。だがソニックはそんな状況に痺れを切らす。

ソニック
「ああ！クヨクヨしてる場合じゃねえぜ！！とりあえず、次はどうすればいいんだ！？」

ピカチュウ
「ピ…、ピッカチュ！！」

ピカチュウはポーキーロボの残骸の奥のほうを指差している。

ポーキーロボの爆発の衝撃で城壁に穴が開いており、そこから城の外へ出られるようになっていた。

ソニック
「成程！ここを抜け出せば何らかの手掛かりが掴めそうだな！行こうぜ！！」

ピカチュウ

「ピッカピ！！」

そしてソニックとピカチュウは城を飛び出した・・・・・・・・・・・・。

第６章　～残酷な少年のポーキー～（後書き）

６章も終わりました＾＾

何かポーキーの事考えてると
書いてるほうが切なくなって来たｗｗ

あと、ソニックが死にかけのポーキーに少し熱く語るところは
ちょっとキャラ崩壊しちゃいましたねｏｒｚ

ピカチュウは人と話せないからソニックに熱く語ってもらわざるを
得ない状況になっちゃったのが原因ですｏｒｚ

あと、ポーキーはＣハンドがタブーだと言う事を知らない設定です。

とにかく読んで頂いてありがとうございました。
引き続き応援よろしくお願いします＾＾

第7章　～サブタイトル未定～（前書き）

うぉーー！！頑張るぜぇ！！

第7章　～サブタイトル未定～

スネーク
「そこだ！！」（ドカン！）

マリオ
「これですべて終わったな．．．。次が遂に終点だ！」

空中スタジアムに居たファイター達は終点を目指し、シンプルゲームの世界を突き進んでいた。

ゼルダ
「それでは、行きましょう。」

終点へのワープが始まり、彼らは終点にたどり着いた．．．。

だが！彼らは終点を見て自らの目を疑った。

ドンキー
「ウホ！？ここはどこだ？」

ガノンドロフ
「これが本当に終点か？」

彼らはニューポークシティに出た。無論、ここはクレイジーハンドが作り上げた亜空間の一部だ。

マリオ
「やっぱり世界に異変が起きてるのか？」

マリオが呟く様に行った。

スネーク
「異変が起きている事は間違い無いだろうな。とりあえず辺りを散策して試(み)るか。」

ピーチ
「危なくないかしら？」

スネーク
「みんなで行動すれば大丈夫だ。仲間がいれば怖くない。」

ガノンドロフ
「実際一人でも十分だ。」

ゼルダ
「まあ、とにかく行きましょう。（何だかんだ言ってガノンドロフが自然に付いて来るなんて変な感じだわ・・・）」

そして彼らは辺りを散策し始めた。

第7章　～サブタイトル未定～（後書き）

まだ未完ですが投稿します。
すみません。

次の更新はおそらく明日か明後日です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2333y/

大乱闘スマッシュブラザーズX　破創の化身と希望の戦士たち

2011年12月24日03時47分発行